わが子のあゆみ

揖斐小学校創立150周年記念事業

今年度は、本校の創立150周年にあたり、航空写真を撮ったりPTAより東門の銘板を新しくしていただいたりしました。

記念式典では、2年ぶりに全校で集まり、揖斐小の歴史を知るとともに、伝統ある校歌を斉唱することができました。鑑賞会では、岐阜総合学園高等学校太鼓部の皆さんに和太鼓の演奏を披露していただき、体験もさせていただきました。全校みんなで盛り上がりました。

2023.3
No.475
春風号
第74巻5号
3

だいすき！
いきいき揖斐小学校

揖斐川町立揖斐小学校

［たじみしりつようせいしょうがっこう］

多治見市立養正小学校

●住　所　〒507-0823
多治見市平野町2丁目80番地
●TEL　0572-22-3181
●児童数　363名

〈地域の自然や風土〉

多治見市は周囲を山に囲まれた緑豊かなまちです。市の中心部を横切るように、遠く伊勢湾へと続く土岐川が流れ、その姿は校歌にも歌われています。養正小学校は1872年学制の公布に伴い、1873年（明治6年）養正学校として創立され、1947年（昭和22年）には養正小学校に改称されました。令和4年度には、開校150年を迎えました。少子高齢化の影響もあり、児童数は年々減少傾向にありますが、広い運動場を自由に駆け回り、手入れの行き届いた芝生の中庭があり、美味しい自校給食を楽しめる恵まれた環境の学校です。

校舎

なかよし養正あそび

学校の教育目標

仲良くはげまし合う子
深く考えみつける子
じょうぶな体で最後までやりぬく子

令和4年度は徐々に活動が再開して、学校中に子どもたちの元気な声が戻ってきました。GIGAスクール構想の下、今までとは違った学習スタイルが急速に広がっています。iPadを学習道具として使いこなす姿がどの教室、どの教科でも見られます。

iPadの活用を通して個々の学習状況に応じた学びが今まで以上に進められる中、子どもたちがおちついた学習・生活を送っていることは、本校のたからものです。

学校のたからもの①

仲のよい「異学年交流」

本校のたからものは、学年をこえた縦割り活動です。週3回の掃除活動は、各学年数名ずつで構成された11～13人のグループで行っています。6年生が中心となり計画から反省会まで責任をもってメンバーをまとめていきます。この異学年縦割りグループで「なかよし養正あそび」も行うことで、高学年のリーダー性や、年上の子が年下の子に優しく接し面倒を見ていく姿が育まれています。

休み時間になると、学年毎のカラー帽子が混じりながら一緒に運動場で遊ぶ姿も毎日見られます。また、児童による企画「全校363人鬼ごっこ」「ペア学年だるまさんが転んだ」は、運動場が笑顔いっぱいの時間になります。

学校のたからもの②

おちついた学習・生活

コロナ禍で学習活動も制限されてきました。対面で話し合いができない、マスクをしての活動、水泳の中止など、ないないづくしの2年間でした。それでも本校の子どもたちはできることをやり続けました。

学校のたからもの③

歴史ある地域との連携

地場産業である美濃焼をもつ土地柄、何世代にわたって本校の卒業生の家族も多く見られます。卒業生だけでなく地域の方々からの協力と連携も本校のたからものの一つです。

地域ボランティアの「安全パトロール隊」や「花いっぱい運動」をはじめとし、学校運営協議会とは、日々連携を取り合い子どもたちの安全安心と成長を支えています。

また、地元のお店の方々の協力の下、低学年の校外学習「まちたんけん」が毎回安全に行われています。本校の伝統である「鼓笛隊パレード」は地域の関心も高く、運動会や「たじみまつり」などで披露する際には多くの方が参観されます。

近年では近隣の高等学校とも連携を図り、高校生による英語授業、150周年記念のロゴマーク製作、古着リサイクル活動への協力も行っています。

鼓笛パレード

iPadを使った学習

花いっぱい運動

150周年ロゴマーク

こいのぼり集会

学校のたからもの④

子どもの成長を支える育友会活動

ここ数年間、本校でもコロナ禍で活動の制限を余儀なくされてきました。それでも学校生活や家庭での生活を、少しでも明るくしよう、わくわくした一年間にしようと、育友会活動を工夫してきました。

年間を通しての「本の読み聞かせ」は、家庭教育委員がボランティアの保護者を募り、子どもの読書習慣を後押ししています。

5月の「こいのぼり集会」は、低学年の学級委員とおやじの会が主体となり、布を裁断・縫製し、子どもが絵描き・色塗りをします。中庭で過去のこいのぼりと一緒に空を泳ぐ様子を見て「小学校って楽しい所なんだ」と1年生も安心してスタートしています。

育友会資源回収

本校は中学校区の小中学校で「合同資源回収」を行っています。校外生活委員や地区責任者を中心に、地域の協力を得て活動しています。また、中学生が母校の小学校の収集場所に来て積極的に参加しています。

令和4年度は、開校150年目の節目の年でした。スローガン「歴史を知る　地域を知る　未来へのゆめをもち　人とつながり絆を深めよう」の下、わくわくした記念行事を学校と育友会が連携して企画しました。

子ども一人ひとりが描いた「ゆめタイル」の壁画製作、卒業生が製作・監修した「たじみ弁かるた」大会の実施、近隣の工業高校のデザイン科とコラボした「ロゴマーク」と校舎屋上のシンボル壁画「おおぞらのにじのわ」、「バルーンリリース」等は、思い出に残る活動となりました。

子どもの成長を支える育友会活動は本校のたからものです。

バルーンリリース

「かかみがはらしりつりょうなんしょうがっこう」

各務原市立陵南小学校

●住　所　〒509-0144
各務原市鵜沼大伊木町4丁目425番地
●TEL　058-370-2211
●児童数　404名

〈地域の自然や風土〉

陵南小学校は、昭和59年、広く豊かな各務原台地の南、眼下に木曽川を望む丘に建てられ、来年度、創立40周年」を迎えます。緑豊かな校庭には多くの樹木や花々、果樹などが植えられ、児童は元気に走り回ったり虫を捕まえたり、運動したりしながら伸び伸びと生活しています。

校地内には、千古の歴史を秘めた大牧1号古墳があります。この古墳は横穴式石室を有し、その石室からは土器や武器、馬具など様々なものが出土しており、有力な豪族のものであることが伺われます。

温かく協力的な地域と家庭に支えられ、「笑顔でつながる子どもたち」が育っています。

校舎

6年生による「愛校当番」
毎朝の旗揚げと清掃活動

学校の教育目標

やさしい心で　たくましく
陵南を　ほこりに思う子

学校のたからもの①
人を笑顔にできる子

陵南小では、「〇〇して笑顔」を合言葉に、自分の行動や活動で、まわりの人を笑顔にすることを意識して生活しています。その意識の継続のために、毎月、全校で調査を行い、100%になることをめざしています。全校で100%はまだ達成されていませんが、学校の顔である6年生が、5回の100%を達成し、全校の手本として活躍しています。

また、全学級で毎日よいところ見つけを行い、順番にお昼の放送でその内容を紹介しています。仲間のよさやがんばりを見つけ、お互いに認め合いながら温かい関係を築いています。

「〇〇して笑顔」がいっぱいの子どもたち

「〇〇して笑顔」になれた

	5月の割合	6月の割合	7月の割合	9月の割合	10月の割合	11月の割合	12月の割合
1年生	100%	100%	100%	92%	98%	91%	92%
2年生	82%	96%	98%	93%	100%	100%	98%
3年生	86%	97%	91%	77%	93%	92%	97%
4年生	94%	100%	98%	78%	97%	99%	99%
5年生	100%	90%	78%	86%	92%	85%	98%
6年生	92%	100%	100%	86%	100%	100%	100%
特支	90%	100%	100%	90%	83%	90%	100%
全校	92%	97%	96%	85%	96%	94%	98%

学校のたからもの②
ともに歩むPTA

陵南小に赴任して3年目になりますが、PTA本部役員が全て立候補で決まっています。いつから続いているかは定かではありませんが、それが当たり前のように毎年引き継がれていきます。立候補のいいところは、本部役員さん方が、子どもたちのために「何をしたらよいか」という姿勢ではなく、「これをやっていきたい」という考えをもち、本部役員会で提案してくださることです。今年度は、「学級文庫がなかなか入れ替わらない。」という子どもの声に、学級委員長さんが「PTAで入れ替え作業したいです。」と提案され、学級委員の組織を使って入れ替えていただきました。子どもたちは早速、新しく入った本をうれしそうに手に取って読んでいました。子どもたちのために、ともに歩むPTAは大きな宝です。

地域の方による
「わくわく読み聞かせ」

児童会による朝の
「あいさつ運動」

全力を出し切った「運動会」

福祉の学習「高齢者体験」

「町探検」地域にあるお店の方にインタビュー

学校のたからもの③
子どもたちを見守る温かい地域

子どもたちの安全・安心を願って、毎日の登下校に同行してくださる見まもり隊の方々。交通事故や不審者から子どもたちを守ってくださるだけでなく、子どもたちのことをよく理解して声をかけてくださいます。

集合時刻に遅れた子には、個別に同行したり、いろいろと話を聞いたりしながら見守っていただいています。子どもたちも見まもり隊の方と話をするときは、笑顔になれます。自転車で急ぐ中学生も、見まもり隊の方に笑顔であいさつをしていく姿を見ていると、地域のつながりは大切だなと実感します。

また、地域の方が低学年の児童に絵本の読み聞かせをしてくださる「わくわく読み聞かせ」や放課後に勉強を教えてくださる「ららら学習室」、遊びを教えてくださる「放課後子ども教室」などの活動もあります。いろいろな場で子どもたちを温かく見守ってくださる地域の方々も大きな宝です。

地域の方による「古墳の草刈り」

学校のたからもの④
学校敷地内にある古墳

本校の敷地内には、「大牧1号古墳」という石室を備えた大きな古墳があります。文化財の扱いなので、子どもたちが直接古墳にかかわることは難しいですが、6年生になり、歴史学習が始まると初めて、この石室の中に入ることができます。「はるか昔にこの地域で大きな力をもっていた豪族」を思い浮かべながら、ひんやりとした石室や石棺を直に見ることは、子どもたちにとって貴重な体験です。

また、年2回、地域の方々が古墳の草刈り等の整備をしてくださいます。子どもたちには、こうやってボランティアで整備してくださる地域の方々の後ろ姿を見て、「自分も大人になったらこの古墳を守っていきたいな」という思いをもってくれることを願っています。

［ぎふしりつながらにししょうがっこう］

岐阜市立長良西小学校

●住　所　〒502-0832
岐阜市千代田町2丁目1番地
●TEL　058-232-5222
●児童数　604名

〈地域の自然や風土〉

長良西小学校は、金華山の山頂から望むことができ、長良川の近くにあります。近くには、岐阜メモリアルセンターや長良川球技メドウ、国際会議場といった県有数の施設があります。また、斎藤道三や織田信長といった戦国武将にゆかりのある地域です。

南舎は昭和31年に建設され、一部を現在も使用しています。北舎は建て替えられ、平成28年に完成しました。伝統ある校舎と新風を吹き込む校舎で子供たちは学習しています。

校舎

第37代村長「パオーン村長」

学校の教育目標

未来にはばたく西っ子
たくましく　ゆたかに　たしかに

学校のたからもの①

児童集会「動物村なかよし集会」

動物村なかよし集会は、本校の特色ある伝統的な児童会活動です。子供たちが楽しく豊かな学校生活づくりに進んで参画していくことができる集会活動を目指しています。今年度は年間で11回実施し、各委員会が全校のくらしを高めるための啓発活動を行っています。各学級の話合いを全校で共有するために、タブレットを活用して実施しています。

集会の終わりには、「動物村の村長」という位置付けで、キャラクターに扮した教師が、子供たちの姿を価値付けたり、方向付けたりしています。今年度は、第37代村長「パオーン村長」です。

動物村なかよし集会の様子

学校のたからもの②

SDGsの視点を取り入れた「西っ子総合」

本校では、総合的な学習の時間を「西っ子総合」と言います。ふるさとを「人・もの・こと」の視点から見つめ直し、生き生きと探究していく中で、自分たちが生活している「ふるさと長良」に愛着をもつ子供を育んでいます。

平成30年度からは、SDGsに着目し、地域の中で生きる自分に何ができるのか考え、長良の地域が世界とつながっていること、自分の行動が世界とつながることを、体験を通して実感できるよう取り組んでいます。今年度は、企業等とタイアップし、様々な体験や講演を取り入れています。（1年SDGsすごろく、2年SDGsカードゲーム、3年豆乳についての学習（キッコーマン）、4年段ボールコンポスト講座（岐阜市）、5年SDGs人生ゲーム（タカラトミー）、6年地元企業と考えるSDGs（川甚））また、コミュニティ・スクールを生かして、地域の方を講師に招き、地域について学ぶことも実施しています。

さらに、子供たちだけでなく、PTA活動においても「廃クレヨン回収」「使用済みカイロ回収」「体操服リサイクル」等、SDGsの取組を積極的に実施しています。

西っ子総合（SDGs体験）

西っ子総合（炊き出し訓練）

社会を創造する子を目指した授業風景

協働的に学ぶ学習活動

学校のたからもの③

「社会を創造する子」を目指して

学校の教育目標「未来にはばたく西っ子」とあるように、「どのように時代が変化しても、他者と共によりよい人生や社会を創り出す子を育てていきたい」という願いから、平成30年度より研究主題を「『社会を創造する子』を目指して」と設定しています。そして、今年度は「たんきゅうする力（探究する力・探求する力）を育成することを大切にし、各教科や特別支援教育についての研究授業を計画的・継続的に位置付け、研究実践を進めています。

授業の中で、生活場面と結び付けたり、仲間と一緒に考えたりする場を位置付けることで、「この場合はどうなるのだろう。」「こうすればよいのではないか」といった発言が増え、子供たち自ら考え実践しようとする姿が見られるようになってきています。

PTA活動（SDGs新聞）

海津市立日新中学校

［かいづしりつにっしんちゅうがっこう］

●住　所　〒503-0654
海津市海津町高須531-1
●TEL　0584-53-0040
●生徒数　297名

〈地域の自然や風土〉

日新中学校がある海津市は、西濃地区の最南に位置し、岐阜県の中で最も海に近い場所となります。伊勢湾に向けて木曽三川が集まってきており、日新中学校の西には揖斐川が、東には長良川が雄大な流れを見せてくれています。校区には、薩摩藩士が宝暦5年、治水工事の完成直後に千本の苗を植えたものと伝えられる千本松原があります。

校舎

「体育大会」
クラスごとに練習を重ねた、生徒会種目「大縄跳び」

「体育大会」
プログラムの最後を締めくくる「手拍子合戦」

学校の教育目標

共に高め合い　自立する生徒

学校のたからもの①
さわやかな挨拶・環境・歌声

日新中学校には、四項目から成る「生徒会宣言」があります。その一つ目の「誰とでも明るい挨拶をしよう」の通り、日中、廊下ですれ違うと、「こんにちは」と笑顔で挨拶をかけてくれる生徒がたくさんいます。しなければいけないからするという挨拶ではなく、相手のことを大切に思う気持ちがあるからこそ自然に出てくる挨拶が飛び交う日新中学校は、毎日がさわやかでとても気持ちがいいです。

また、教室の環境も整っています。例えば、下校後に校舎内を回ると、どの教室も机列やロッカー内がピシッと揃っており、さわやかな気持ちになります。

今年度は、さわやかな歌声も復活の兆しを見せています。新型コロナウイルス感染症対策のため長らく控えていた合唱の交流ですが、今年度は、三学期に行われる「伝統を引き継ぐ会」において、学年ごとに合唱を発表する予定でいます。それに向けて、11月22日より本格的な合唱練習が始まり、校内がさわやかな歌声に包まれています。

学校のたからもの②
自治力・自浄力を高める生徒会活動

日新中学校の生徒会には、「学習」、「環境」、「保健」、「生活」、「給食」、「文化」の6つの委員会があります。日新中学校では、これらの6つの委員会が、別々にではなく、取組内容をそれぞれ決めて同時に取り組むキャンペーン（以後CPと表記）が節目節目に行われています。これまでに行われたCPは次の通りです。

「2年　阿納研修」
青い空と海に囲まれた中で
シーカーヤックに挑戦

「授業の縦割り交流」
1,2年生の代表が3年生の授業を参観

「3年　修学旅行」
最高の思い出ができた東京への
2泊3日の修学旅行

「1年　名古屋研修」
班ごとに考えた計画に沿って
やり切った班別研修

・新年度スタートCP（4月）
・団対抗体育大会CP（5～6月）
・後期スタートCP（11月）

「後期スタートCP」は、後期の組織の役割を確実に行えるように引き継ぎ、前期積み上げてきた委員会活動の成果を後期の姿につなげていくことをめざして行いました。委員会ごとに取組内容を決め、例えば、保健委員会では、「午前の手洗いタイムに全員が手洗い・消毒を行う」という取組を保健委員が中心になって呼びかけたり、見届けたりしました。6つの委員会が同時に取組を展開するCPを行うことは、生徒のよりよい学校生活に対する意識を喚起し、生徒自身による自治力や自浄力を高めることに結びついています。

「1年　土嚢づくり体験」
洪水から命を守る“垂直避難”の訓練後に、
土嚢づくりを体験

「2年　職場体験学習」
海津市内の46の事業所の協力を得て
3年ぶりに実施

学校のたからもの③
全校の絆を深め、共に高め合う縦割り交流活動

日新中学校では、年間を通して縦割りの関わり合いを大切に共に高め合っています。一学期には、縦割りの絆を深める絶好の機会である「体育大会」が行われました。今年度の体育大会のスローガンは、「新しい自分への挑戦～全員で創る　最高の時間～」でした。このスローガン達成に向け、競技の練習はもちろんのこと、日常生活を高める「団対抗体育大会CP」にも力を入れて取り組みました。その中で、生徒たちは、同じ団の縦割り集団の中でしか味わうことのできない、厳しさの中にある真のやさしさや温かさに触れ、団としての絆を深めることができました。

この体育大会で深めた縦割りの絆を日常生活の中で生かすために、その後も「授業の縦割り交流」や「掃除交流会」、「歌声交流会」等の縦割り交流活動を継続的・発展的に行い、学年の枠を越えて共に高め合うことを大切にしています。横（学級・学年）の絆はもちろんのこと、このような縦（縦割り）の絆を土台に、学校教育目標の「共に高め合い　自立する生徒」をめざし、日新中学校の生徒一人一人は、常に新しい自分への挑戦を続けています。

PTA24 hour 保険のお勧め

岐阜県 PTA 連合会では、「令和の時代を生き抜くたくましさを身に付けた子どもの育成」を掲げ、日々子どもたちの成長を支える活動を進めています。

各単位 PTA においても、伝統的な活動に加え、近年のめまぐるしい社会の変化や新たな課題に対応すべく工夫された活動を展開しています。しかし、その活動中に予期せぬ事故が起きているのも現状です。GIGA スクール構想による高額な ICT 機器の使用、また昨年 10 月 1 日より「自転車損害賠償責任保険等への加入義務化」「乗車用ヘルメットの着用努力義務」が全面施行されるなど、子どもを取り巻く環境が大きな転換期を迎え、保護者として注意を怠れない状況が増えています。

子どもたちが安心して家庭や学校での生活を送るために、PTA 会員への割引適用で手厚い補償が可能な PTA24 保険を、多くの会員の皆さまにご利用いただきますようお薦めします。

岐阜県 PTA 連合会　　会長　野平 英一郎

1. **岐阜県 PTA 連合会の団体割引 30%、優良割引 20%** が適用されます。
2. **学校のタブレット**を壊した賠償責任も補償します。
3. **中学校卒業まで**らくらく自動継続です。毎年の手続きは不要です。
4. **ウイルス**による入院にも備えて、病気の補償を一層充実させました。
5. **加入が義務づけされた自転車による損害賠償責任**に対応しています。
6. 「賠償責任保険加入済」**自転車添付用反射ステッカー**を差し上げます。

ご加入方法

スマホ・タブレットよりアクセスし、入力してください。

保険の詳細もご覧いただけます。
お通帳をお手元に、所要時間は約5分です。

保険期間	2023年4月6日　PM 4:00~ 2024年4月6日　PM 4:00	申込み締切日	2023年4月5日

1月号を読んで

リレーエッセイ22を読んで、「その子らしさを尊重する」という言葉に、私もハッとしました。つい自分の思いを押しつけてしまう事もあります。子どもの気持ちを尊重し、のびのび育てていきたいと思いました。（Nさん）

朝の排便は、元気のバロメーターと書かれていました。小学生の息子は、朝の排便がありません。学校へ行っても出ないのか、我慢をしているのか、排便をしたことがありません。家へ帰ってきてからトイレに走って行きます。毎日のことなので心配です。健康に成長していくためには、早寝早起き、バランスの良い食事、運動の習慣が大切になってきます。自然な朝排便になっていくように、声かけ、見守りを頑張りたいと思います。（Ｉさん）

朝の排便の記事を見ました。うちの子も家では毎朝排便があるようですが、学校ではなかなかしづらいようです。子どもの健康のためにも、バランスの良い食事、水分等も気にしたいと思いました。（Mさん）

いつも子育てのヒントになっています。特に、養護教諭の先生の朝ごはんの内容が良かったです。バランスの良い朝ごはんで、学校生活を応援したいです。（Kさん）

特集「親子でサイエンス」のコーナーはとても参考になりました。最近の子どもたちは、紙の切れ端や使い終わった物を再利用して新しい物を作る機会が昔のようにはないようなので、今度親戚のチビちゃん達と工作する予定です。（Hさん）

「お試しクッキング」は、いつもかわったメニューを載せてくださり、ありがたいです。子どもも手伝えて、おいしく作れています。オムレツのみぞれかけ、はじめて食べておいしかったです。（Yさん）

1冊の本の「かべのむこうになにがある?」の本の話が良かったです。（Ｉさん）

「続・親子でサイエンス!」を読んで、身近にあるものだけで、色々なものができることに感動しました。（Aさん）

1月号の表紙が地元の中学校の行事の様子でした。コロナのため３年ぶりにゆかたDAYが行われました。中学の娘が授業で「かわさき」という踊りの唄を習い、先生方と下駄を鳴らしながら踊れて、嬉しかったと言っていたのを思い出しました。途中で雨が降り中断しましたが、しばらくしたら止み、また再開できました。それも含めて良い思い出として娘の記憶に残りました。感染対策をしながら先生方が生徒達に地元の伝統を体験し、地元のことを誇りに思ってくれるよう努めてくれていることに改めてありがたく感じます。（Sさん）

「教育の窓」…教員という仕事、本当に大変だと思って読んでいました。子どものために頑張ってくださる先生には感謝しかありません。教員を目指す方が増えて欲しいです。（Kさん）

今まで回覧されてきてもあまり読んでいませんでしたが、意外にも読み応えのある冊子でした。また次号を楽しみにしています。（Tさん）

今号の表紙が子どもたちが通う中学校が紹介されており、うれしく思いました。子どもと「お姉ちゃん、いないかな?」なんて話しながら、３年後、自分もこんなことするんだなと思い、見させていただきました。地域のことが紹介されていて、「わが子のあゆみ」は地域密着型で身近に感じることができていいですね。（Tさん）

もくじ　わが子のあゆみ　2023.3 No.475 初春号

表紙　揖斐川町立揖斐小学校
1　**学校のたからもの**
多治見市立養正小学校／各務原市立陵南小学校
岐阜市立長良西小学校／海津市立日新中学校
11　**特集**　第2分科会講演「発達障がいの正体と共生（抜粋）」
元岐阜特別支援学校地域支援センター長　神山 忠　氏
17　**みんなで家庭教育！**
岐阜県環境生活部環境生活政策課
18　**先生！ありがとう！**
保護者から先生へ贈る感謝の400字メッセージ
19　「多様性尊重の教育㉘」
みんな、いっしょに　安田 和夫
21　**保健室ノート**　今井 和美
23　**私の先生㊸**　高橋 美穂
25　**わが家の宝物**　三島 明日美
26　**リレーエッセイ㉓**　大西 真寿美
27　**子育て半生記**　遠山 邦明
29　**楽しい読み聞かせ㉒**　下呂市立小坂小学校PTA
31　**親の背中⑰**　戸田 一文・川添 博友
33　**私が出会った1冊の本【続58】**
林 洋男・榎 亜沙子
35　**子の思い**　松本 悠吾・林 渚十・穐吉 優空
親の願い　安藤 克浩・山下 三枝子
教育の窓　水﨑 綾香・和田 由美子
40　**話そう!語ろう!わが家の約束**　伊藤 佑佳・北 純一
41　**親子ではてな**
42　**お試しクッキング**
岐阜県学校栄養士会・（公財）岐阜県学校給食会
43　**ふるさとの伝承**　各務原市立緑苑小学校
45　**きらり！キッズ！**　山県市立桜尾小学校
47　**夢中！熱中！我らが部活**　大垣市立北中学校
49　**私たちのＰＴＡ**　郡上市立明宝中学校ＰＴＡ

第77回日本ＰＴＡ東海北陸ブロック研究大会　清流の国ぎふ大会

第2分科会講演

「発達障がいの正体と共生（抜粋）」

元岐阜特別支援学校地域支援センター長　神山忠　氏

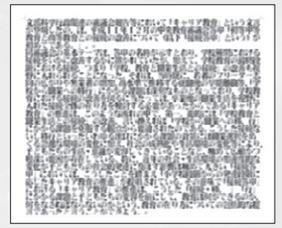
私はどんな人間かと言いますと、学校教育に順応できなかった、そんな人間だと思っていただければ良いのかなと思っています。

私は、診断書という物を持っています。発達障がいの診断書なんですが、具体的に言いますと、読みに関しては小学校2年生程度、意味をくみ取る能力は小学校4年生程度。でも、代読と読み上げソフト等を使えば、一般成人並みということです。書字に関してもちょっと苦手があり、肉質で書く文章を一定量に正確に書ける能力は小学6年生程度。でも、ワープロソフト、パソコン等を使えば、一般成人並みということで、読み書き障がい（ディスレクシア）という診断を貰っています。

諸外国に目を向けると、著名人でも同じようなディスレクシアをカミングアウトしているトムクルーズさんやスピルバーク監督さんなんかもみえますが、決して珍しい障がいではありません。それで、何が諸外国と違うかと言うと、諸外国では、あの人たちは必要な支援さえ提供すれば、その人らしい輝き方で社会に貢献できる存在になる。だから支援するといったスタンスでいます。日本だと、「福祉サービスを受ける側」、そんな固定される面があるように思っています。

今、徐々に日本も必要な合理的配慮をしていることで、その人らしい生き方ができるという考えに変わって来ているので、そういった考えに拍車をかけていけると良いと思っています。

これを見て、読めた方どのくらい居ますかね？なかなか読めた方多くはないと思うんですが、私が文章を見た時、こんな感じで混乱してしまいます。どこに注目していれば良いのかが分からないんです。けれど、「いらない情報（上下）を隠して、白に目をやったら」と言われたら、「ああそうか、ＬＩＦＥ、ライフか！」と読めますが、邪魔な情報があると、どう読んで良いのか、どこに着目して良いのかが分かりません。そんな特性があります。



初めて見る文章なんかも、こんなふうにしか見えません。

「黒に目をこらすと良いはずだ」と思って、グーっと見ていくんですが、なかなか目をこらしても、この状態が精一杯。この状態だともう、縦書きなのか横書きなのかも分からないので、先ほどと同じように上下左右を隠すことで、やっと情報量をコントロールして、拾い読みができる状態にできます。

障がいの特性に合った支援

小学校の2年生の時です。こんなことがありました。

2時間目と3時間目の間にちょっと長めの休み時間があって、2時間目が終わった時に、黒板にこんなふうに先生が書かれて、休み時間が始まりました。

> きょうはてんきがいいのでそとでたいいくをします。

私は、その休み時間を使って、黒板に書かれた文字を一生懸命読み解きました。何とか拾い読みを20分かけてできたんですが、3時間目、運動場に出て行くことはできませんでした。

「読めた、音声化できた、音読できたら意味分かるんじゃないの？」と言われるんですが、音読＝意味理解ではないんですね。音声化するだけで自分のキャパはいっぱいいっぱいで、意味理解ができていないというそんな状態でした。じゃあ、どうしたら良いかというと、暗記状態まで読み込むとやっと頭でイメージできる段階に入れるので、文章から意味を読み取ろうと思うと、くみ取ろうと思うと暗記するしかなかったので、とっても労力がかかる状態でした。

「何か良い方法はないの？」と言われると、実はあります。何かと言うと、「分かち書き」にして貰えると丸暗記しなくても良いんですね。

「きょう／は／てんき／が／いい／ので…」ということで、出て来た所、出て来た所で、頭にイメージを浮かべられるので、丸暗記するまで読み込む必要がなくなります。しかし、全ての教科書を分かち書きに書き換えるなんていうことはできなかったので、どうしたかというと、赤ペンで斜線を入れる。分かち書きふうの状態にして授業に臨んでいました。これ、先ほどの区切り方とはちょっと違って、助詞も一緒にまとまりとして入れて区切るんですが、この区切り方でいけるようになったのは、中学校に入ってからです。この区切り方でいけるようになったきっかけというのは、中学校に入った時に、「とにかく覚えなさい。」と言われたのが、この「Ｉ ｍｙ ｍｅ…」ってやつで、その時にふっと思ったんですよ。「Ｉ」ひと文字で、「私は」なんだと、あっ、そっか、今まで「私」「は」とか、「私」「の」とか、別々に自分の中に語彙をためていって、それを引っ張り出して合わせて、意味理解していたんだけど、「私は」「私の」という所で、自分の中に語彙をためれば良いんだということに気がついたんです。

きっと皆さんは、語彙をためよう、語彙をためようと思って過ごされたかというとそういった方は少ないんじゃないかなと思います。

私の第一言語は何？と聞かれたら、「図です。」と答えます。ここに思いとしてはあるんですが、それを伝えようと思うと、どの語彙を使ってどの順番で伝えると良いのかっていうのが分かんなかったので、「この思いあるんだけど伝えられない、何とかしなきゃ。」という思いで、一生懸命語彙をためようと思いながら過ごして来ました。

> メモで
> たいことばちをもってきて
> たい　ことば　ち　を　もってきて

小学校3年生の時ですが、こんなお使いをメモで貰いました。

このメモ、前から一生懸命、意味のある所で区切って理解しようと思って頑張りました。その結果どうなったかというと、こうなりました。

「たい／ことば／ち／を／もってきて」

「えっ!?今日の給食は鯛が出るんかな？、『ことば』はどこだろう、う～ん図書室かな？、違う、理科室かな？、いや保健室ならありそうやな。えっと、南舎行って、北舎行って、また南舎やで、どうやって回って来よう？」なんて考えていたら、音楽の授業が始まるチャイムが鳴って、「ほんとにあんたは使えん子やね！」って叱られたことがありました。

正しい所で「分かち書き」するということは、その頃はできなかったので、その辺も支援してくださる方が近くにいたら良かったのかなと思います。

緊張感の高まる空間

小学校3年生の頃の私の状態というのは、「と」とか「の」…、つまり助詞の意味が分からなかったんですね。太鼓とか、バチというのは頭に図として浮かびやすいんですが、「と」のイメージして下さい。「の」のイメージして下さいと言われても、みなさんもきっと、「えっ!?どんな図にしよう？」と迷うと思うんですが、図で考える私にとって、「と」とか「の」の意味が分からなかった。イメージが持てなかった3年生の頃は、すごく苦労していました。

どんなふうに過ごしたかっていうと、「分かんない所は、周囲の雰囲気から察して補っていこう、過ごさなきゃ。」と思ってすごく緊張状態を高めて過ごしていました。廊下から教室に一歩入るときに、「ウ～、ヨシ！」と気合いを入れないとなかなか入れませんでした。こ

こから一歩入ったら、自分の分からない文字や言葉が飛び交う所、そこで笑われないように、叱られないように、失敗しないように過ごさなきゃと思うと、もう、分かんない所を補うために、持っているアンテナをすべてピンピンに上げて、補って補って、察して察して動こうという、そんな状態になってしまうので、とっても緊張感が高まってしまう空間でした。

支援の鉄則という誤り

小学校４年生になった時にこんなことがありました。

クラス替えがあって、クラス発表の後、新しい教室に入って、何とか班決めも終わった時でした。「ああ、仲間はずれにならなくて良かった。」と思っていた時です。先生が班に一冊ずつノートを配ってくれました。

「班ノート始めるよ。みんな好きなこと書いて、班の中で回しあっこして、みんな早く仲良くなってね。」と、そんなような説明をしてくれました。「あ、自分も頑張ろう、友達いっぱい作りたいな。」という思いで、その話を聞いていました。その説明が終わったかなと思った時に、先生が思い出したかのようにこんなことを言ってくれました。「あっ、そうそう、神山君の班の子ね、みんなね、平仮名で書いてあげてね。」と言ってくれたんですよ。それを聞いた私は、「あっ、今度の先生は、自分のことをとっても気にかけてくれる良い先生なんだ。感謝しなきゃ、感謝しなきゃ…」と言い聞かせました。でも、その気持ちには至りませんでした。どんなふうに思ったかというと、「もう、教室からかけだして外へ行きたいな、それができないんなら、机の下にもぐりたいよ…」と、そんな気持ちになりました。何でか分かりますかね。クラス替えがあって、自分のことを知らない友達が４分の３くらい居る。そんな４月のスタートの時に、神山君の班だけ、みんな平仮名で書いてあげてねって言われたのは、「神山は勉強できん奴やぞ！」とみんなに知らされた気持ちになってしまって、そこに居られない、そんな心境になりました。

班の子は、その先生の言いつけを聞いて、みんな平仮名で書いてくれました。平仮名ばかりの文章ってとっても難しいんですね。「あるみかんのうえにあるみかんをもっていってね」なんて書かれても、「アルミ缶の上に在るミカンを持って行ってね」なのか「アルミ缶の上にアルミ缶を持って行ってね」なのか分かんないんですね。でも、片仮名、漢字、平仮名が混在していれば、「あ、この字面は、果物の方やったな、ミカンやな。あ、こっちは缶カンの方やな」って、字面と図のマッチング作業で、意味をくみ取れるんです。でも、勉強のできない子には平仮名で支援するというのが支援の鉄則のように思われていて、分かることでもより分からないような形で支援されることはいろんな場面でもありますが、そんなものが積み重なっていくうちにどんどんどんどん遅れていって、意欲もなくしてしまいました。

違いを認め合える社会

子どもたちは、自分たちの行動で、一生懸命警鐘を鳴らしてくれています。戦後の教育を見てみると、校内暴力とか色んなものがあったんですが、今は、発達障がいとかの状態で子どもたちが警鐘を鳴らしてくれていると思うので、そこに支援者が気付いて、本来在るべき環境を整えていきたいなと思っています。

ゆっくりな人が居るから速い人が居る。これは誤解を招く言葉かも知れませんが、ゆっくりな学びの子が居ちゃダメみたいな環境になってしまうと、誰もが休むことが許されない、そんな環境になってしまうんじゃないかな。ゆっくりな人が居るから、速い人も時には立ち止まれたり、スピードを落とすこともできるんじゃないかな。ゆっくりな人が居ちゃいけないみたいな雰囲気になったら、誰もが止まることすら許されない社会になってしまうと思います。ゆっくりな学びの子、ゆっくりな成長な子、スローランナーと言われる子たちを、どれだけ大事にしていけるかが、みんなの過ごしやすさ、みんなの自分らしい成長に繋がるのではないかと思っています。

「成長」と考えると、バランスの良い成長を望むというのは、ある意味理解できますが、それよりも、みんなこじんまり収まってしまうよりも、偏りがあったり、凸凹があったり、いびつであっても、居場所があると良いのかな、「飛び出た所は何とか削れないかな、足りない所は何とか埋めれないかな。」、そんな関わりをされると、苦しい子も出てしまうんじゃないかな。だから、そのでっぱった所、得意な所で、集団に貢献して貰えれば、その方が豊かな集団、豊かな社会に繋がるんじゃないかな。そのために、違いを認め合えるという視点で子どもたちの力を育んでいけると良いと思います。

二次的障害を引き起こす言葉

小学校２年生の時に、読み物を配られて、１時間読んで、次の時間に感想文を書くというような授業でしたが、１時間読み終わった時点で私はどのくらい読んだかというと、３行と３分の１くらいしか読めませんでした。全部で30行ぐらいの文章だったんですが、まったく進んでいませんでした。授業の終わりがけに先生が回って来て、だんだんだん後ろから近づいて来るのが分かりました。この辺でぼそっと声がしました。「神山君、まだこんな所？」そしたら、一斉に周囲の子が私の方を見て、「うそやろう、僕なんかもう２回目読んどるのに、お前何やっとったんや！」なんていう声が飛び交いました。「自分なりに一生懸命集中して読んだのに、何でこんなこと言われなきゃいけないんだろう…」なんていう思いになって、気持ちが処理できませんでした。

「この指は絶対離さんぞ、離したらどこまで読んだか分かんなくなっちゃうから離さんぞ！」って決めていた指も外してしまって、机の下に持っていって、グ～って握りしめて震っていました。どの文字までいったか、にらむかのように見ていたんだけど、だんだんだんだんプールの底に書いた文字のように揺れ出して、最後にはぼろっと大粒の涙が出てしまいました。その瞬間、「もう文字なんか嫌い、絶対本なんか読まへん！」と決意することになってしまいました。それまで、できないなりに努力はする子だったけど、努力すらしない時期を迎えてしまうことになってしまいました。たった文字数にしたらこれだけの言葉（まだこんな所？）ですが、とっても重い言葉でした。

あと、よく言われて辛かったのは、「廊下で立ってなさい！」と出されてしまうことです。自分なりに何とかみんなと一緒に学びたい、ついて行きたい、頑張ってみんなと学びたいと思っているのに、なかなかついていけない。分かんないからキョロキョロキョロキョロする。それでも察しれない時は、「誰々ちゃんは何やっとるのかな？どうやってやっとるのかな？」と、ちょっと教室内を立ち歩くようになると、「授業中は立ち歩かないの、ちゃんと座っときなさい！」と言われて座らされる。座ったら、「今ここをこうやってやってるから、これ頑張れよ。」と教えて貰えれば良いんですが、それはない。とにかく座っていなさいと言われる。でも、自分としては何とか学びたいので、どうするか…立ち歩けないから周りの子に聞く、「トントン、今どうやってやるの？、何やるの？」、はじめはそれで教えて貰っても、だんだん教えて貰えなくなると、「トントンでダメなんやで、そっか、ドンドンにしてみよう、ドンドンでもダメになったな、そうか、バンバン…」というようにエスカレートしてしまって、「授業妨害する奴は廊下に出て行け！」ということで、廊下に出て行く。そんなことに繋がっていきました。

実際廊下に出ると何が起きるかというと、壁を一枚隔てて、教室の中から楽しそうに授業が進んでいく声が漏れ聞こえて来るんですね。それを聞いていると「ああ、自分が教室から居なくなると授業ってこんなふうに楽しく進んでいくんや。やっぱり自分は教室の中に入っちゃいけない人間なんやな…」ということを実感してしまいました。そこで、立って教室の中から漏れ聞こえて来る声を聞き続けるのはとても辛かったので、どうなったかというと、校舎内を徘徊するようになっていきました。そして、そんなことをすると又叱られるという、どんどんどんどん叱られるスパイラルになっていきましたが、たった読めたのは３行と３分の１ぐらいかもしれないけど、「まだこんな所？」の言葉じゃなくて、「神山君、ここまでだったけど主人公の気持ち大事にしながら頑張っているんだね。」なんて言って貰えたら良かったのかな、同じ行動でもプラスにとって声をかけて貰えると助かるんじゃないかなと

思います。

校舎内を徘徊するようになって、素敵な出会いが待っていてくれました。用務員さんとの出会いでした。色んな所を修理して下さる方で、その方が色んな手伝いをさせてくれて、「お前がおるで、ほんと助かるわ。ここも直せたわ、ありがとな」と言ってくれて、必要としてくれる人が居るんだということを実感させてくれて、何とかその方のおかげで、学校にも行けたな、なんて思います。

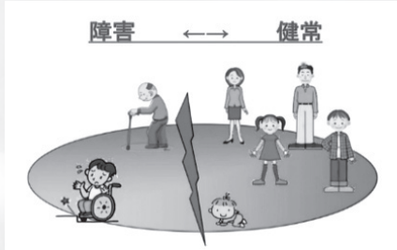
中学校でも色々ありました。明日国語の本読みあるとなると、もう前の晩、一生懸命練習しました。まず何をするかというと、赤ペンを持って斜線を引く、分かち書き作業、それで1時間半。本読みを1時間半、トータル3時間練習してもぜんぜん流ちょうさが出て来ない。みんなの前で授業中当てられて、つまりつまりで読むと、「こんな物も読めんかったら小学生以下や。努力が足りん、努力が！」と言われて、みんなの前で叱られました。みんなの前で授業をストップして、努力が足りんと叱る。そんな労力があるんなら、前の日に、「明日本読みあるけど、俺上手いこと、お前にこの3行当たるようにしてやるで、この3行だけでいいで頑張れよ。」なんて言って貰えたら助かったのかなと思います。

障がいは個性

障がいのポイントっていうのはどこにあるのか、ちょっと話が大きく飛ぶんですが、こ

の人、段差があるから越えられない。そのポイントは、この足にあるのか、この階段にあるのかというのが今、大きく見直されています。

何かというと、医療モデルと社会モデルということで言われるんですが、医療モデルというのは、健常者というのは配慮が必要じゃない人、障害者っていうのは配慮がいる人という考え方で、原因が足にあるという考え方です。でも、大きく変わって来たのは、社会モデルを重視しようということです。

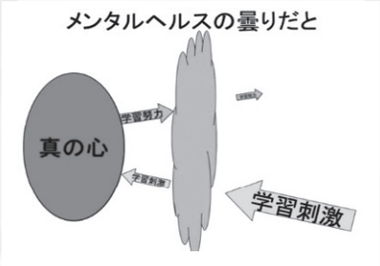


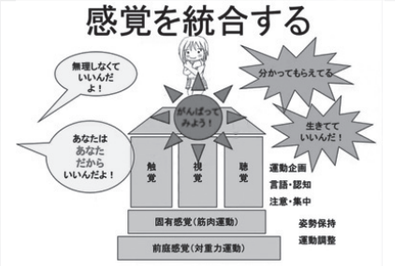
健常者というのは、既に配慮を受けられている状態の方を言う。障害者というのは、未だに適切な配慮を受けられていない状態の人たちを言うというふうになって来ています。社会全体、この社会モデルに転換しつつあるんだけど、一人一人の心を見てみると、「自分の中でも健常」、「障がい」って人たちを見た時に、「境」を入れているなと思います。

どこに「境」を入れているかというと、「あの人たちとのやりとりは何とかできるな」という所に「健常」というエリアの「境」。「あの人たち、ちょっと関わるの苦手だな」という所に「障がい」という「境」を入れているのかな。つまり、心の持ちようで「境」を入れているので、心の持ちよう一つで、その「境」をずらすこともできるだろうし、取っ払うこともできるんじゃないかなと思います。その方が、みんなが尊重し合える世界に向かっていけると思っています。実際、障がいは不便なことはありますが、イコール不幸ではない。だから、多様性を認めて、必要な配慮・合理的配慮を提供していくということがカギなのかなと思います。そういったことができていくと、「障がいは理解と支援があれば、個性」と言える、そんな社会に向かっていけると信じています。

メンタルヘルスの曇り

辛いこととかトラウマ的になることがない健康的な心の状態だったら、学習刺激がもし入ったとすると、「よし、僕頑張るぞ！」ということで、学習努力として表出できるだろうけど、今まで辛いことがいっぱいあった、失敗したこと叱られたことがいっぱいあると、心に曇りがかかってしまう。そこに対して学習刺激が入ったとしても、この曇りが邪魔をして、減った状態でしか心に届かない。その減っ

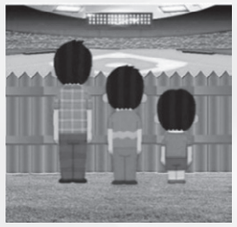




た状態だけど、刺激を頑張って返そうと思って努力するんだけど、又その曇りが邪魔をして、減った状態で出てくる。「お前、これだけ頑張れって言ったのに、こんだけしかできんのかよ。」って言ってしまったら、この曇りは、どんどん厚みを増してしまう方向にいくような気がします。些細な努力かも知れないけど、それを認め励ましたり、さらには、学習という軸じゃなくて、色んな軸でその子を認め励ますことで、心にかかった曇りを晴らしていけるんじゃないかと思います。

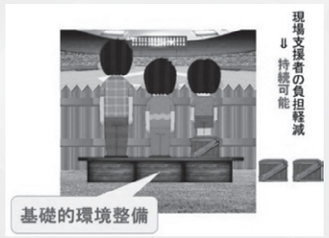
子どもたちを見てみると、色んな感覚がまだまだアンバランスな状態の子が多いです。そこを理解してやりたい。アンバランスな所で頑張って立っててくれているので、「頑張れ頑張れ、約束したでしょ！」って言われても、「できないよ、怖いよ」ってなっちゃうと思うので、こういったアンバランスさ、凸凹さも整えながら、なおかつ心でも余裕が持てるような声かけをしていけると良いのかな、そうすることで、やっと前に踏み出せるんだと思います。

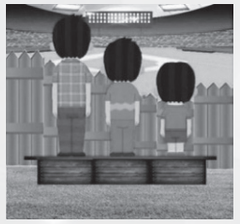
持続可能な支援



野球観戦に行って3人の子が見に行ったんだけど、野球観戦の目的を果たしたのは、この左の子ですよね。他の子は果たせていない。けれど、ここに3つ箱があったとしたら、今どういう状況が生まれるかっていうと、器用な子がパっと見つけてその子が独り占めする。そんな社会だと格差の拡大になるし、格差の固定化になってしまう。だからといって1個ずつ分け合えば平等公平かというと、この右の子は、まだ野球観戦しに行った目的果たせていませんよね。これが在るべき配慮なのかな、平等公平という物の捉え方を考え直す時期に来ているように思います。

現場で個々の配慮をしていくとなると、とっても労力が必要です。





そこに対して、こんなベンチが来たなら、左の子も見やすくなるし、真ん中の子は配慮なくできるし、右の子も1個の配慮でいけるようになるので、2つの支援が必要ではなくなって、持続可能な状態になると思います。

または、それぞれ同じ高さで見るんじゃなくて、フェンスの高さを変えるなど、それぞれ配慮した動きを設定していくというのもこれから必要になって来るんじゃないかと思っています。大学入試なんかも色んな配慮が得られるようになって来ました。ですから、こうじゃないとダメではなくて、多様性を認めていけると良いと思っています。

最後です。合わせさせる教育より、共に生きる教育を目指せると良いと思います。

集団の中に入れさせること、集団に合わせさせることを目的にするのではなく、集団に認められる、集団と共に居られる、そういった教育に向かっていけると良いな、その方が持ちつ持たれつで、お互い循環し合える良い関係ができる社会に向かっていくような気がしています。

岐阜県環境生活部環境生活政策課

家庭で子どもに教えたいことや、育みたい力など、
家庭教育のヒントになる情報をお伝えします！！

みんなで家庭教育！

来年度より「こども家庭庁」が発足することは、皆さんご存じのことと思います。これは昨年6月15日に「こども家庭庁設置法」が可決・成立したことによります。この時「こども基本法」も可決・成立しました。

子育てにおいて大切なこと 親として子どもにしてあげられること

1994年に「子どもの権利条約」を批准した日本ですが、今まで「子どもの権利」を守る法律がありませんでした。来年度から施行される「こども基本法」には、家庭教育に関わることも記されています。「子どもの権利条約」の4つの原則と「こども基本法」の基本理念には重なるところが多く、この部分について簡単にまとめてみると、「子どもを育てる責任はその父母にあり、子どもが心身ともに健やかに成長できるように努めなければならない」「子どもに関係あることを行うときには、子どもにとって最もよいことは何かを第一に考えなければならない」「子どもは、自分に関係のあることについて、自由に自分の意見を表すことができ、その意見を子どもの発達に応じて、十分に考慮しなければならない」ということになるでしょうか。

人としての資質は、先天的な面と後天的な面がありますがその割合は、一対三だと言われています。赤ちゃんは人の子として育てられることで人間らしくなります。温かく柔らかいお父さん・お母さんに抱っこされ、優しく愛情のこもった言葉をかけられながら育つから人間になるのであって、動物に育てられれば、人間らしさは備わりません。また、愛情が不足すると、愛情遮断症候群という病気になり、言語や知的の発達が遅れるようになり、表情が乏しくなったり、不眠症などの睡眠障害の症状が現れたりします。

親が子どもにどのように接するかが、子どもの成長や人格の形成に大きく影響するということです。例えば、

心配で過剰に手をかけてしまうと「何も自分でできない子」に。

親がしゃべりすぎると「自分の考えや思いを話さない子」に。

親が忙しくしていると、子どもは遠慮して、「困っていることや悩んでいることも話さない子」になってしまう可能性が高まります。

親であれば子どもに期待してしまうのは当たり前なことかもしれませんが、親の過度な期待が「教育虐待」になることもあります。

しかし、褒められたり、認められたり、やり遂げる経験を重ねると、それが子どもの心の支えとなり、困難にも負けず頑張ることができることもあります。

話は変わりますが、日本では古くから落雷でキノコが豊作になるという言い伝えが信じられ、農家では嵐の到来を歓迎するところがあります。

シイタケやなめこ等のキノコ類に、稲妻と同程度の電気的刺激を与えると、収穫までの時間が短くなったり、収穫量が倍近くになったりした実験結果もあります。適度なストレスが菌の成長を活性化させるわけです。

人間も同様のことが言えるかもしれません。過度なストレスは心身の不調の原因になりますが、ストレスフリーの状態がよいかといえば、そうとも限りません。何か乗り越えないといけないことがあり、それに向かって立ち向かい乗り越えた時に自信が生まれ、充実感が生まれるのです。そのようなことを繰り返し人は成長します。

最近の子どもは大切に育てられ過ぎて、我慢できない、打たれ弱いと言われます。就職しても、仕事のことで少し厳しく指導されると簡単に心が折れてしまったり、自分が思っていた仕事内容とは違うといって、仕事を辞めたりしてしまうことが取り上げられています。

子育てに正解はありませんが、大切なことは親が愛情をもって子どもに接し、その愛情が子どもにしっかりと伝わるようにすることです。わが子の資質を理解することに努め、子どもに合った適度なストレス（課題）や体験的な活動の機会を与え、自分から挑戦することができる力をしっかり育てることが大切なのではないでしょうか。

子どもの可能性を広げるのは、一番身近な存在である親の大切な務めです。子どもが自分の力で人生を歩んでいけるようにサポートしてあげてください。

環境生活政策課
家庭教育推進専門職　辻 治彦

先生！ありがとう！

子ども達にも、保護者にもあたたかく見守ってくださる先生方へ

～保護者から先生へ贈る感謝の四〇〇字メッセージ～

日頃よりPTA活動にご理解、ご協力いただき誠にありがとうございます。

PTA本部役員として活動してみると、学校生活の様子、子ども達の様子、PTAの方々のバックアップ、生徒会の子ども達の頑張りが、より近く見えました。そして、全体を取りまとめてくださる先生方には、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

新型コロナウイルス感染症が落ち着いたり、流行ったりの繰り返しの中、急な行事等の変更、状況に合わせて会議を重ねていらっしゃると思います。子ども達の安全を第一に思案していただいているおかげで、少しずつではありますが、学校行事等の規模を変更しながらも執り行われることが増えてきました。

仲間たちと意見を出し合い役割を決める。目標を掲げて一致団結していくこと。最後には、子ども達の笑顔と笑い声で満ち溢れることが、子ども達の大いなる成長でもあり、保護者や先生方の一番の望みなのではないか、そんな風に思っております。

PTA活動において、毎月先生方と会議をする中で、子ども達の意見を優先し、願いをかなえてあげたいという先生方の思いがたくさん伝わってきて、親としてとてもうれしく思いました。

PTA活動において「できないところは、私共がやるので無理しないでください。」と、温かい言葉をかけてくださることで、私たちもできることを頑張って子ども達の支えになろうと思うことができ、安心して取り組めています。

本当にいつもありがとうございます。どうぞこれからもよろしくお願いします。

（土岐市立泉中学校 令和5年度PTA研修委員長　生駒 陽香）

information

■作品を募集しています。

イラスト・なぞなぞ・逆さ言葉などの作品を募集しています。イラスト・絵手紙はハガキの裏面に描いてお送りください。ペンネームを使う場合にも、郵便番号、住所、学年と氏名を表面に記載してください。なぞなぞ・逆さ言葉は「親子ではてな」の回答とともにお送りください。

宛先はいずれも　〒500−8816 岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内「岐阜県PTA連合会・作品係」まで

採用の方にはお礼をさしあげます。

■本誌の購読について

本誌は年間5回発行（7・9・11・1・3月）されます。年度初め（4～5月）と7月の2回、各学校PTAを通じて購読募集を行います（1冊200円、5冊1,000円）が、年度途中でもお求めいただけます。学校または県PTA事務局へお問い合わせください。

■7月号のお知らせ（予告）

特集=続・親子でサイエンス／表紙=柳津小／学校のたからもの=富加小・川上小・宮田小・蘇原中／わが家の宝物=温知小／リレーエッセイ／みんなで家庭教育／みんな、いっしょに／保健室ノート=釜戸小／私の先生=牛牧小／子育て半生記=芥見小／楽しい読み聞かせ=養老小／親の背中=美濃小・竹鼻中／1冊の本=広見小・岩邑中／わが家の約束=清見小・梅林中／子の思い=安井小・小泉小・那加中／親の願い=藍東学園・星和中／教育の窓=下有知小・真正中／先生！ありがとう！=向陽中／お試しクッキング／ふるさとの伝承=阿木中／きらり！キッズ！=河合小／夢中！熱中！我らが部活=穂積中／私たちのPTA=北和中

【多様性尊重の教育㉘】シリーズ

みんな、いっしょに

本当はみんなと声を出して話したい

岐阜聖徳学園大学教育学部特別支援教育専修 教授　安田 和夫

「かんもく」とは

今から約20年前、岐阜県総合教育センター内の学校支援課という組織に属していた際に、障害や疾患のある児童生徒やそのご家族の方の相談を担当していました。その時に出会った子どもたちは、すでに成人になり、様々な場所で活躍しています。今も、年賀状の交換やメール交換等により連絡を取り合っている青年やご家族も少なくありません。

当時の相談内容は様々なのですが、「かんもく（場面緘黙／選択性緘黙）」のお子さんと毎年のように出会いました。たとえば、家庭では元気にお話できるけれども、一歩、家を出る、あるいは、園や学校に行くと、声がうまく出ずに、本当は声を出して話したいのに「話せない」という状態像です。中には、話すことができないだけではなく、体の動きも一瞬のうちに硬直し、止まってしまうというケースもありました。交差点の真ん中で、止まってしまうこともあり危険と隣り合わせです。ご家族もとても心配されていました。また、ご本人も自分の意思とは関係なく起こることなので、自らコントロールすることはとても難しく、不安なようでした。どのケースも、何回か来てくれるようになると、人間関係ができてくるのが実感でき、近くの公園に出かけて遊具で遊んだり、野球をやったり、二人で楽しむことができるようになりました。たとえ、声を出して思いを伝えることができなくても、表情や仕草から伝え合うことができており、楽しい時間を過ごしました。すると、私に直接話せなくとも、お母さんにこそこそと耳打ちして私に伝えようとしたり、声を出して笑ったりするようになりました。「信頼できる大人になる」…それが、第一歩でした。

担任として

実は、それ以前に、かんもくの生徒の担任をしたことがありました。揖斐郡の中学校で3年生の担任をしていたときに、Aさんに出会いました。彼女も、学校では、声を出しての会話や発言はできないのですが、家に戻ると、とても元気に声を出して生活できていました。Aさんの一日をよく見てみると、「声を出して話ができない」という以外は、係の仕事も給食当番もしっかりやってくれていましたし、授業中もノートをしっかりとり、授業に真面目に取り組んでいました。保護者の方に聞くと、小学校の頃から、学校では声を出すことができなくなったそうです。

この中学校は1，000人を超える生徒数でしたので、3年間、同じクラスになったことがないということが不思議でもなんでもない状況でしたから、3年生になって、初めてAさんと一緒のクラスになった生徒も多く、学級替えがあった4月当初は不思議そうに見ている様子もありましたが、5月の連休の頃には、学級の一員として溶け込んでいる様子に見えました。

ある朝のこと、掲示物を準備しようといつもより早く教室に行った時です。Aさんがお花を持って登校する姿に出会いました。毎週、教室のお花が入れ替わっていることは知っていたのですが、誰からもその情報が入ってこないので、私自身、不思議に思っていたのです。Aさんが毎週月曜日ごとに切り花を持ってきてくれて、生けてくれていたのです。そのお花は、お花屋さんで買ってきたものではなく、お庭で育てているお花のようでした。季節にあったお花が週初めにいつも飾られていることで、教室全体が穏やかな気持ちになれます。

当時、毎日発行していた学級通信「出発点」にそのことを紹介しました。Aさんは、言葉が出せないけれども、心豊かで、みんなのために毎週お花を持ってきてくれているということを記事にしたのです。学級の生徒達は、とっくに気がついていたのかもしれません。それでもいい。Aさんの優しい気持ちにふれて、「本当にうれしい」という気持ちを、みんなと共有したかったのです。

Aさんは、中学校卒業後、すぐに社会人として働くことになりました。しばらくして、飲食店で元気に過ごしていると聞きました。元気に「いらっしゃいませ」「ありがとうございます」と声をかけて頑張っているだろうなと思いをはばたかせ、「遠くから応援しているよ」と心の中で幸せを祈りました。

「なっちゃんの声」の読み聞かせ

現在、岐阜聖徳学園大学で教員養成に携わり、特別支援教育の分野を担当しています。特別支援教育を専門分野として学んでいる学生だけでなく、教員免許を所得しようとする学生を対象に「特別支援教育基礎」という授業を担当しています。実は、数年前より、教育職員免許法が改正されて、教員免許を取得する際には、必ず「特別支援教育」の分野から1単位以上取得しなければならないことになりました。

そこで、5名の特別支援教育を担当する教員が分担して、教員を目指す3年生に授業を進めています。この中では、主に、通常学級の担任として身につけておきたい特別支援教育の基礎知識や、様々な障害や疾患に対する知識と教育的対応、保護者との関わり方などを、演習を交えて進めています。その中で、この「かんもく」についても扱っています。

その際、先ほどの私が出会った児童生徒のことやそのご家族のお話をいっぱいします。また、声を出し会話したり本読みしたりすることを指導するのではなく、まずは、「話したくても声が出ない」という状態を理解して、学校、学級が安心な空間であるようにしていくことの大切を伝えています。そして、その環境づくりの要は、人的環境、すなわち、身近な大人である担任、そして、仲間である級友の存在だとして、絵本の活用を例にして、正しい理解と共感的な関わりを広げていくことを紹介しています。

かんもくの女の子を紹介した「なっちゃんの声―学校では話せない子も達の理解のために―」（はやし　みこ作：学苑社）という絵本の読み聞かせをします。学生達は、真剣に聞いてくれます。「かんもく」ってどんな状態なのか、当事者やそのご家族ははどんなことを望み、どんなことをつらいと思っているのか、ストーリィーの中で出てくる子ども一人一人の気持ちに自分を重ね合わせながら聞き入っています。そして、最後に、自分たちのさりげない一言がなっちゃんを傷つけていたことや、ドキドキさせてしまっていたことに気づくことができた級友達がなっちゃんを囲み、「ごめんね」とこれまでの発言をなっちゃんに直接謝ることができ、さらに、よき理解者として寄り添ってくれるようになるシーンでは、子どもたちの心の成長を感じることができるのです。

養護教諭を目指す学生にも

特別支援教育の単位取得は、養護教諭の免許を取得しようとする学生も義務となりました。本学の看護学部の学生の中にも、養護教諭を目指す学生が数名います。今年も、何人かが私の「特別支援教育基礎」を受講してくれました。その中で、4年生の学生が、「教員採用試験に受かりました。」と、私にも喜んで報告に来てくれました。こうして、巣立つ学生が「特別支援教育基礎」を受講し、養護教諭として、そして、将来、専門性を生かして、特別支援教育コーディネーターとして活躍してくれる日を楽しみにしています。

保健室ノート

生活習慣は一生のプレゼント

本巣市立真桑小学校
養護教諭
今井 和美

今年度赴任した学校で親となった教え子と再会することができました。懐かしそうに、その当時の保健室ではこんなことがあったと、30年も前のことを語ってくれました。また、ある日は、具合が悪くなった児童を迎えに来てくれた保護者が教え子だったこともありました。朝、学校へ来るときには、お母さんがお家で咲いた花を保健室にも持たせてくださっていたなと懐かしく思うとともに、その子たちが自分の育ってきた地元で子育てをしていることを嬉しく思った瞬間でもありました。

真桑小学校は、本巣市の南に位置する児童数496人の中規模校です。同じ世帯ではないものの3世代が近くに暮らす家庭が多い地域であり、たくさんの地域の方々が子供たちを見守ってくださっています。

そして、赤ちゃんが生まれると、それぞれお住いの市町村で乳幼児健診が始まります。これも地域の見守りです。その後、学童期には小学校、中学校で健康診断が行われ、青年期、成人期と繋がっていきます。このような健康を見守る活動もこの地域にある学校の役目です。

本巣市では、小学校4年生と中学校1年生、その他肥満度30％以上の児童生徒を対象に小児生活習慣病予防健診を行っています。血液検査や生活習慣病の学習を行いますが、実は、児童生徒の血液検査は学校保健安全法で定める健康診断の項目に入っていません。

生活習慣病とは、毎日の生活習慣の積み重ねが起因する病気のことを言います。例えば、食習慣では、高カロリーな食べ物や味付けの濃い物をよく食べたり、朝食を欠食したり、間食を食べたりすることなどが続くことで、高脂血症や動脈硬化、高血圧の症状が現れ心疾患や脳血管疾患につながる恐れがあります。同じように、運動不足や睡眠不足になる生活習慣が続くことで病気につながってしまう病気のことを生活習慣病と言います。このような症状は成人だけのものと思われていましたが、今では、子供たちにもみられる症状であることがわかり、小児生活習慣病と名付けられています。

そこで、学校医の先生の助言もあり、子供たちの健康を守るためには必要な検査であるということで、この地域の小中学校でも小児生活習慣病予防健診が始まりました。

さて、今年度の4年生児童の生活習慣を見てみると、毎日、朝食を食べている児童97・1％、毎日、間食や夜食を食べる児童55・8％、毎日、排便がある児童59・6％などでした。また、学校に行っていない時間には、57・7％の児童がテレビを見たりゲームをしたりして過ごし、体を動かして遊んでいる児童は16・3％ほどでした。血液検査の結果はまだわかりませんが、これらの生活習慣が子供たちの体にどれくらい影響しているでしょうか。

何年か前に、「今度、子供の血液検査があるね。私も母と検査後の指導受けたこと覚えているよ。」と、親となった立場でこの検査のことを話してくれた教え子もいました。

時代が変わり、子供たちを取り巻く環境が変わった昨今、その環境が体や心に与える影響も変わってきました。しかし、毎日の生活習慣から引き起こされる病気は変わることはありません。より良い生活習慣は、大人が子供に与えてあげられる一生のプレゼントであると思っています。

地域の方に見守られて登校するまくわっ子

あこがれの授業をめざして

白川町立蘇原小学校
教頭　高橋 美穂

「違う。もう一度やん直し。（やり直し。）」

自分が、教師を目指すうえで大きな影響を受けた先生であり、中学3年生の時、理科の授業の開始時に、その先生からよく言われた言葉である。始まりの挨拶を終えるとすぐに、その日の当番グループが、①前時、何を調べるためにどんな実験を行ったのか。②その実験によって何が分かったのか等、振り返りをすることになっていた。しかし、内容が不十分であったり、伝え方が分かりにくかったりすると、すぐ「やん直し。」と、言われてしまうのだ。この「やん直し。」の声がかかると、何がいけなかったのか、グループのみんなと話し合い、どきどきしながら発表し直した。

さらに、ノート（プリント）も、一つの実験が終了するごとに提出することになっていた。授業で学んだことがきちんとまとめられていないと、プリントの右端にのっている5段階評価の〝1〟のところに○がつき、再提出となるのだった。これもまさに〝やん直し〟だ。私は、やり直しになりたくないという思いで、先生の話される言葉や、黒板の隅に書かれる何気ない理科の道具の名前なども逃さないようその場でメモをするようになった。

これらのことからも、妥協を一切許さない、とても厳格な先生であったことは分かってもらえると思う。実際、私の周りの友達からも、「あの先生は怖いから苦手。」と、言っている子は多かった。私も他のどの先生より、この先生と話をする時が一番緊張した。しかし、不思議なことに、私は、この理科の授業がどの教科より大好きだった。いやこの先生の理科の授業が一番好きだった。

理由は三つある。一つ目は、最初は、半ば意地でやっていたノート作りについて、「板書されていない私がつぶやいた言葉ですら、大切に記録しているところと、自分が覚えやすいノートに工夫している。」と、頑張りを認めていただいたことがあった。普段、褒められることがあまりない自分にとって、この先生から褒められたことが、本当にうれしかったことを今でもはっきり覚えている。（30年以上経った今でも、その時のノートは宝物として、大切に残している。）

二つ目の理由は、毎時間、驚きや新しい学びを実感できる授業であったことである。40人学級であったにも拘らず、全員が実験に関われる工夫をされたり、自作のプラネタリウムのようにスケールの大きな教材を準備されたり、座学になりがちな単元についても、体験・体感できるような工夫が常にあったからである。

そして、三つ目の理由は、とにかく、話し合う場面が多かったことである。例えば「水溶液に電気を流すと明かりがつく。水溶液の中で、何が起きていているのか」を、それまでの学習で学んだことをもとに、グループの仲間と想像をして一つの方法を出す。その後、グループごとで、〝これが正解なのではないか〟という、考え（説）にたどり着くまで、とことん話し合った。先生は、どのグループの発表についても、その考えが〝正解である〟とか〝間違っている〟とかということは言われず、うなずきながら真剣に聞いてくださり、そこまでの頑張りを認めてくださった。

今思うと、この先生が、理科の学習を通して、私たちに、その教科の楽しさは勿論、自分の考えをまとめる力や表現する力、共に考え、よりよい考えを導き出す力を高めようとしてみえたことがよくわかる。

自分が、進路を決定する高校3年になった時、一番にその先生のことが思い出され、自分も『子ども達に、教科の楽しさを味わわせることができる先生になりたい』と教師（体育）の道を選んだ。

現在、教師になって30数年、この先生から学んだ『授業の楽しさ』や『思考し続けることができる授業の展開』ができているかはまだまだ課題は多い。しかし、子ども達にとって「運動って楽しい。仲間と共に体を動かすって楽しい。」と実感できるあの『あこがれの授業』を目指し、これからも、自己研鑽に励んでいきたい。

郡上市立白鳥中学校 PTA会長　三島 明日美

わが家の宝物

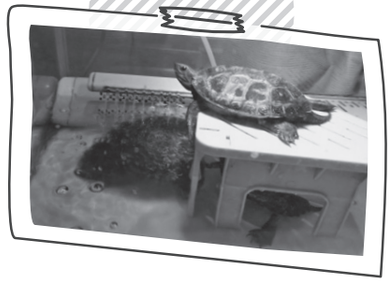
わが家の宝物って何だろう、そう思って私が真っ先に思い浮かべたのが、四匹のカメです。カメコケ、かめくん、おーくん、ギザくん。まだ小さなイシガメです。

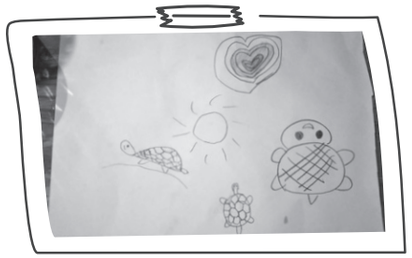
お日様が当たる日には、石の上でひなたぼっこをしたり、私たちが近づくと「ご飯ちょうだい」とばかりに寄ってきたり。じっとカメを見ていると、とってもかわいくて癒されます。

六年前、次男が年中のとき。保育園へカメを持って来ている子がいて、それを見た次男が「カメがほしい」と言い、川で探してきたのがカメコケです。その後かめくん、おーくん、ギザくんと増えていきました。最初はカメのお世話は私ばかりしていました。子どもたちは捕まえてきて数日はカメに夢中。だけど水槽を洗うのはとても大変なのでやりません。

でも、二年前くらいから次男がカメのことを、責任をもってお世話するようになりました。エサの管理、水槽の管理、毎日カメに話しかけています。自分のお小遣いでカメの飼育道具を買ったりもします。次男はカメが大好きです。長女は、お世話はあまりしませんが、絵を描くときカメのイラストが必ず登場します。長男は次男がお世話に困っていると、助けてくれたりリードしてくれたりします。父親も仕事が休みの日には、カメの水槽を洗う次男のことを手伝ってくれます。

一見、カメのことを宝物って思っているのは次男だけに見えますが、家族のことをつないでくれているカメたちは、我が家の大切な家族であり、宝物です。





リレーエッセイ 23

子どもの話を聴く大切さを痛感

岐阜市立島小学校ＰＴＡ
大西 真寿美

今回このリレーエッセイを書くにあたって何を書こうか迷いましたが、私が親として子育てで日頃意識していることを記そうと思います。それは「傾聴」です。

「お母さん、今日ね～学校でこんな事があったよー」

帰宅後は特に沢山話したいことが溢れてきます。寝る前も心が落ち着いて次々話題が出てきます。ついつい親が聞きたいことを根掘り葉掘り聞き出したくなりますが、子どもが話したいことをできる限り聴くようにしています。どんなくだらないと思えることも面白おかしく反応し、ゲームやアニメなど正直私にはよく分からない分野も、子どもがどんなことに興味を持ち、どこに惹かれているのかそんな子どもに関心を持って聴くようにしています。これは子どもが小さい頃からずっと意識して続けてきました。うちには小学生と高校生の子がいますが、上の子は思春期真っ只中。よくお母さんとは話さなくなるでしょう?と言われますが、そんなことはなく色んな話をします。学校や友達のことはもちろん、将来の話や社会のことも、趣味や部活に異性の話題だって。たかが傾聴ですが、否定せず余計なアドバイスせず続けてきたことで、昨年受験生だった時も不安な気持ちや葛藤を受け止める事ができ、結果的に子どもは安心して自信を持って受験する事ができました。受験生によく言ってしまいがちな勉強しなさいを一度も言ったことがないように思います。

子どもたちは正直、全部親に何もかも話すことはないでしょう。でもいざ自分が困った時、どうしようもなくなった時に、いつでもあなたの話を聴くよの姿勢で親がいることがどれ程心強く安心できるのかを子どもの成長と共に痛感しています。これからも一緒に笑ったり泣いたり怒ったりしながら、人生面白がりながら生きていこう。

最後に、日頃から子ども達を温かく見守り支えてくださっている、先生やＰＴＡの方々、お友達や地域の皆さま、関わる全ての方に感謝申し上げます。

次回は… 各務原市立稲羽東小学校ＰＴＡ　橋本 祐理子さん

子育て半生記

ふるさと

恵那市立大井第二小学校 PTA会長　遠山 邦明

あなたにとって『ふるさと』とは何ですか？この漠然とした質問にはっきりと答えられる人は多くないかもしれません。

私が暮らす、恵那市は岐阜県の南東部に位置し、愛知県と長野県に隣接した、風光明媚な豊かな自然に囲まれた地域です。しかし、日本全国の多くの地域で共通した課題である、少子化の流れを受け、消滅可能都市となることが危惧されています。特に恵那南地区では急激な少子化に伴う生徒数の減少が顕著であり、中学校の統合を踏まえた再編を余儀なくされております。

私は地元の高校を卒業後、愛知県の大学への進学を機に、この町を離れました。その頃は、早くこんな田舎を離れ、都会で暮らしたいという想いが強く、長期休暇の際にもあまり帰省することもなく、大学卒業後もそのまま名古屋にある会社に就職しました。その頃も自分の生まれた町にまったく関心もなく、帰省はおろか、戻ることすらも考えたことはありませんでした。その後、自分で事業を行いたいと考えるようになり、父と弟が司法書士を営んでいていたことから、12年振りに地元に戻り、1年間の勉強の末、行政書士の資格を取得しました。しかしながら、高校卒業後、同世代の友人とのつながりもないことから、仕事につながればいいなという軽い気持ちで、地元の青年会議所に入会しました。

そんな折、3・11の東日本大震災が発生し、当時、防災担当の委員会に所属していた私は、震災から2週間後に岩手県の陸前高田市と宮城県の石巻市へ災害ボランティアとして向かいました。テレビの画面越しで状況は理解していたつもりでしたが、私が向かった先は、奇跡の一本松が立つ海岸沿いの地区であり、住宅の基礎さえもすべても津波で流され、荒野のようでした。これまで自分の生まれ育ったまちが無くなるということを想像したこともなかった自分は、その惨状を目の当たりにし、言葉を失いました。その現場では、住宅が建っていた一区画のがれきの撤去を行いましたが、そこには写真の一部や家財道具もあり、少し前までは普通の日常を送っていたであろう生活のにおいが残っていました。

これまで自分のふるさとに思い入れがなかった私の中で、この経験は人生に強く影響を及ぼした原体験となり、ふるさとを見つめ直すきっかけとなりました。

若い頃は、自分のふるさとの欠点ばかりに目が行きがちとなり、自分のまちの魅力に気づかないことが多々あると思います。年を重ね、振り返ると、今の自分があるのは、多くの人との出会いによって、自分自身が磨かれたからであり、その原石であった自分のルーツは何であるかを考えたとき、思い浮かぶのは、ふるさとです。このまちで生まれ、このまちの学校に通い、このまちで友人を作り、このまちで生活をする、そんなこれまで気にも留めていなかった日常の営みこそが今ある自分のルーツとなっていることに気が付きました。

本年度、第一期生として入学した小学校のＰＴＡ会長を拝命したことは、何かの縁を感じざるをえません。学校では、私の頃にはなかった、ふるさと教育として、自たちのまちの魅力を感じ、ふるさとへの愛着心を育てることを目的に地域のもの、人、ことと関わる総合学習に取り組んでいます。こういった自分のルーツを形成する時期に自分のふるさとについて学ぶことは、将来必ずやふるさとに誇りを持つ心を醸成すると信じています。

最後に、冒頭の問いに対する私の答えを記してこの寄稿を終わりたいと思います。

『ふるさととは、私のルーツであり、このまちそのものが私である。』

Illustration&Quiz
イラスト&クイズ

PN. らく（揖斐郡）

PN. 木村 恵美（各務原市）

question 1

出題・市村 優成（関市）
〈答えは41ページ〉

ウナギに棒を1本あたえると違う生き物に変身します。それは何でしょう？

楽しい読み聞かせ 22

地域とつながる読み聞かせ

下呂市立小坂小学校PTA

本校では、地域の読み聞かせボランティア「糸でんわの会」の皆さんに定期的に来ていただいています。

◎朝読書の時間に読み聞かせ

毎回、各学年に合わせた本を選んで読んでいただいています。朝の読み聞かせは、年間10回計画されています。11月18日の読み聞かせは、1年生「くまのこうちょうせんせい」2年生「いのちをいただく」3年生「やさしいライオン」4年生「槍ヶ岳山頂」5年生「わたしのげた」と「紅玉」6年生「にじいろのさかな」でした。各教室では、「糸でんわの会」の方がお話に合わせて読み方を工夫してくださるので、子どもたちは自然と耳を傾けて聞いています。5年生のクラスに下駄が準備されてありました。子どもたちになじみのない下駄のお話を身近に感じてほしいという思いからでした。子どもたちは、手に取ってお話を聞いていました。

◎大きなスクリーンによる「糸でんわ集会」

朝の読み聞かせとは別に、体育館で「糸でんわ集会」が年間2回開かれます。BGMと共に、大きなスクリーンに本の美しい挿絵が映し出されます。お話の内容に合わせた声の出し方や語りに、児童は本の世界にどんどん引き込まれていきます。11月9日の「糸でんわ集会」は、「へいわってすてきだね」と「地獄のそうべえ」でした。子どもたちにも人気の本で内容を知っている子もいましたが、効果音もまじえてじっくり読んでもらえることで新たな発見があったり、違った感じ方を見つけたりしていました。小坂小の子どもたちは、「糸でんわの会」の皆さんの読み聞かせを毎回楽しみにしています。

◎「糸でんわの会」の皆さんにインタビュー！

「糸でんわの会」の皆さんには、平成10年から小坂小学校に来ていただいています。今回は、「糸でんわの会」の皆さんにインタビューをさせていただきました。

Q1 「糸でんわの会」は、どのように発足されましたか？

A1 初めは地域の子どもたちに日曜日に公民館などで読み聞かせをしていました。学校への読み聞かせは、平成10年よりスタートしました。小坂小学校だけでなく、下呂市内の学校にも行っています。

Q2 本を選ぶときに大切にしていることは何ですか？

A2 季節にあったもの、楽しく聞けるもの、自分たちが訴えたいことが表現されているもの、そして小坂の昔話を取り上げるようにしています。小坂には素晴らしいお話がたくさん語り継がれています。小坂の子どもたちにもぜひ知ってほしいです。

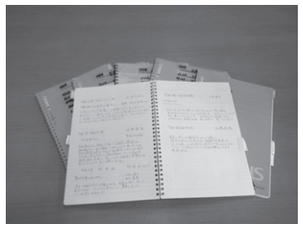
Q3 どのように読み聞かせの練習をしていますか？

A3 みんなで集まって練習をします。お互い聞き合うこともよい刺激になり、とても楽しいです。BGMも自分たちで選び、本のイメージが膨らむように工夫しています。昔話を読むときには、方言に気を付けています。独特な言い回しがあり、また地域によって微妙に発音が違うので面白いと思います。子どもたちに自分たちのふるさとの言葉を感じてほしいです。

Q4 どんな思いで読み聞かせの活動を続けてみえますか。

A4 子どもたちが一生懸命聞いてくれることが本当にうれしいです。自分も子育てを経て、読書することを習慣づけることが大切だと思いました。小坂小の子どもたちにも少しでも本を好きになってほしいと願っています。

また、地域の子どもたちと読み聞かせを通してつながっていけるということに幸せを感じます。



◎「糸でんわの会」の皆さんとの温かいつながり

平成25年から「糸でんわの会」の皆さんが記されてきたノートがあります。本の題名と、読み聞かせをした時の感想が丁寧に書かれています。皆さんが子どもたちを大切にしてくださっていることが伝わってきます。読み聞かせを通して地域の方に育てていただいていること強く感じます。

親の背中 ⑰

息子からのメッセージ

瑞穂市立中小学校
ＰＴＡ会長　戸田 一文

小学６年生になる「わが息子」を見て感じること。似てきたな…と。まだ、息子が小さいころから、「歩く姿がそっくり。」、「照れたときの表情が似てる。」など言われてきましたが、正直、自分では実感がわきませんでした。

わが家は、共働き家庭。父親である私は、自営業。母親の家内は、正社員として企業務め。比較的、時間に融通の利く私が中心に、ＰＴＡ関連の行事への参加、学童へのお迎えなどを行っています。最近は、晩御飯の支度、洗濯物の取り込みなどの家事を私と家内、そして息子と分担して行うのが日課。今までは、息子に対し、その都度、指示を出さなければ手伝えなかったことも、日課として行えるようになり、「あれ、やった?」と聞けば「もう終わった。」と、ぼそっと呟くようなやりとりをしています。

そんなある日、晩御飯の支度時間に少し余裕があったので「作るところから手伝って。」とお願いしたところ、「うん。」の返事がありました。いつもは配膳するだけでも「えー。」と嫌々だったのに、珍しく前向きな返事。息子とふたり、パスタを作ろうと料理を始めました。「まず麺をゆでて。」と指示を出し、３人分を渡し鍋へ投入。その仕草、手つき、どこかのシェフか?と言った具合。「どこで覚えた?」の質問に対して、「うー…。」と言うだけの、ぼそっと返事は、相変わらず。具材を炒めて、麺と絡めてと、工程を伝えながら進め、いざ盛り付け。トングを上手く使い、クルッとまとめて皿の上へ。２回目の「どこで覚えた?」の質問にも、ぼそっと返事でしたが、その表情には、照れ隠しの笑顔がありました。自分でこしらえた料理を美味しそうにほおばる息子を見ながら、ふだん私が作っている後ろで、宿題をしたり、テレビを見たりしているだけかと思っていたけれど、「見ているのだな。」と実感しました。息子は、見てるつもりも、学ぶつもりもないのだろうけど。

「見られている」と感じた瞬間、背筋が伸び、姿勢を正す。これは、大人も子供も同じことなのだろう。いいところは真似してもらいたいけれど、ダメなところは、そう思いません。しかし、そんな都合よくはいかない。息子のダメなところは、よく考えてみると、私のダメなところとも一致します。しっかりと、引き継がれています。いま一度、姿勢を正し、私自身が成長をすること。その姿を息子に見せていくことが、親の努めだと考えさせられました。また、「あなたを見ている」というメッセージは、直接伝えなくても、何気ない会話、言動の中にありました。家庭での日々の生活は、家庭でできる教育の場であり、その一番の教育者が親であることは間違いない。

小学校へ入学した６年前、私の背中を下の方から眺めていただろう息子も、今では、ほぼ同じ高さで見ている。いつかは、私を上から眺め、「おやじも小さくなったな。」と感じる日もくるだろう。もうしばらくは、真似をしたくなるおやじとしての背中を見せていけるようにしていきたいと思います。

中年男の独り言

大垣市立上石津中学校
ＰＴＡ会長　川添 博友

寡黙でめったに意見は言わないが、ここぞという時には誰よりも頼りになる威厳のある父。それが私の漠然とした理想の父親像でした。子育て真っ最中の現在、娘二人に「父親の背中とは?」と問うと、「ゲームしている背中～」「分んなーい」という、答え。妻に至っては、「父の背中はシミだらけでしょ?」と、何とも切ない答えが。そして、女子三人で笑い合う。

これでお気付きでしょうが、現実の私は威厳も何も、家族に弄られるただのしがない中年男になっています。とは言え、愛する家族を守るため、自分の健康のために始めたジョギングを数年継続できていることは大きな自信となっています。娘たちの成長と共に変わる生活リズムによって、走る時間帯は変化していますが、自分で時間を捻出して走ることは続けています。走っている暇があるなら手伝ってほしいという妻の嫌味が出ないよう、家事はもちろん全力で手伝っています。一昔前の自分の父親では考えられないですが、休日には洗濯に掃除、日頃の食事の手伝いなどなど率先して家事をします。娘たちも父親が家事をする事は自然な事として思っていますし、それぞれ出来る範囲で手伝いもしてくれます。また、勤務地が自宅から近く自転車通勤のため、地区の小学生の登校の見守りも続けています。雨の日は合羽を着て、雪の日は徒歩で、毎朝、小学生の子らと登校します。おかげで近所の子らには『おっちゃん』と親しみを込めて呼ばれていますが、我が子だけでなく、地区の子供たちの成長を見守れることに幸せを感じます。

確かに、日頃は毎晩お酒を飲み、携帯ゲームに夢中になり、甘えてくるのは愛猫のみという父親では、威厳のある背中を見せられてはいないと思います。ですが、やるべきことはしっかりやって、後は思いっきり自分の好きなことで楽しもうという我が家のスタイルは悪くないと思います。私が長い晩酌を続けている中、宿題を終えた娘らはテレビを見たりゲームをしたり、夕飯の片付けを終えた妻は趣味のギターをうるさくかき鳴らしたり。同じリビングでそれぞれ好きなことをして同じ時間を過ごすひと時の積み重ねは、決して当たり前ではなく、貴重な一瞬だと思います。そんな風に、酔った頭で幸せを噛みしめている今日この頃ですが、最近、妻にこう言われました。

「あなたの優しさも年を取ったけど、私たちにとっていい父親・夫であろうとずっと、努力し続けてくれていることに気付いたわ。だから、私も家族にとっていい私であろうと努力する気になる。」

そんな親の背中を見て、娘たちもやるべきことはしっかりやりつつ、それぞれの人生に楽しみを見つけてくれたら、それ以上に望むことはないのです。

私が出会った1冊の本【続58】

親鸞

著者：五木 寛之
出版社：講談社
中津川市立坂本小学校PTA副会長　林 洋男

この本との出会いは、岐阜新聞で毎日、連載されていた小説がきっかけでした。面白いと気付いてからは、毎日、小出しで出てくる新聞小説を非常に楽しみにしていました。連載期間を調べてみると2009年～2014年となっているので、今から10年近く前になります。本の内容としては、親鸞の幼少期から浄土宗を興した法然と出会い越後へ流刑になるまでを描いた「親鸞」、流刑地の越後での生活やその後、関東での布教を描いた「親鸞 激動編」、親鸞が京都に上り亡くなるまでを描いた「親鸞 完結編」の三部作となかなかの大作です。

作品自体は、長いものですが軽い文体と、かなりエンタメに振った内容でスイスイと読み進める事ができます。物語のどの巻でも、親鸞と敵対する勢力が現れて、権力や圧倒的な力を使って、圧力をかけます。親鸞の仲間には、元武者・元比叡山の坊さん・石投げの名手・傀儡師（旅芸人の1種）などがいて、親鸞が困った状況になる度に助けてくれます。その中の1人の石投げの名手「ツブテの弥七」を紹介します。もとは、子供同士が河原で行う戦争ごっこのような石投げの名手が徒党を組み、白河印地の党という武装集団の頭となります。世間的にも、認められる存在となり、後白河法皇の私兵となり、働きます。白布に包んだ石を頭上でぶん回し、雨あられと飛んでくる矢を風車のように叩き落す技をもってます。映像化された際には、このシーンは必須でしょう。親鸞に身の危険がせまると、どこからともなく石が飛んできて、白河印地の党が現れ、弥七に何度も助けられます。弥七を代表する仲間たちの存在・自由な生き方が、網野善彦的な中世の歴史観や漂泊の民の世界観に通じていて、彼らの群像劇がこの物語の魅力の1つとなっています。

著者いわく、あくまで小説という事ですが、仏教的な問答も所々にあり、面白いです。

「貧乏の解消」「病の治癒」「商売繁盛」など実益的なご利益を仏教や念仏によって、手に入れる事ができるかどうかの質問を数人の大衆がします。親鸞は以下のような話をします。親鸞が若いころに、断崖絶壁がある夜道を通って、荷物を運ばないといけない役目が申し付けられた。道中、月の光が消えると、荷物が肩に食い込んで、体が思うように動かない。どこにいるのかもわからず、いまにも深い断崖から真っ逆さまに落ちていくのではないかと思い、恐怖に身がすくんでしまった。その時に月光があたりをくっきり照らし出して、その道をたどっていけば目的地に着く事がわかり、嘘のように体が動いた。「念仏をしても、決して背負った荷の重さが軽くなるわけではない。行先までの道のりがちぢまるわけでもない。…行先の光が見える、その心強さだけで弱虫の私は立ち上がり、歩き出す事ができた。念仏とは私にとってそういうものだった。」

親鸞が活躍した鎌倉時代は、飢餓・凶作・戦乱・大火・地震などで絶え間なく、京都の鴨川が死体であふれた終末的な時代でした。浄土真宗などの鎌倉仏教が広がったのは、希望のない社会の中に「月光」を親鸞たちが指し示せたからかもしれません。現代の日本は、飢餓に苦しむという事はないですが、年間の自殺者数は2万人を超え、未来が見えず、不安を抱えている人々がたくさんいる状況です。経済的な観点からは、今後、もっと厳しくなる事が予想されます。苦しい時に、明日への希望を求めるのは、時代が違えど共通している事だと思いました。

著者である五木さんが、この本に関係ありそうな本を出しているので、別の機会に読んでみたいです。

やさしいあくま

文・絵：なかむらみつる
出版社：幻冬舎
岐阜市立藍川東中学校　PTA会員　榎 亜沙子

私が読んだ本は「やさしいあくま」という絵本です。作者のなかむらさんはポエムが有名で、ほっこりする言葉や現実をユーモアに表現する素敵な作品が沢山あります。この作者の影響で私もポエムを書くのが好きになり、親や友だちにプレゼントするようになりました。そんななかむらさんの絵本ということで興味が湧き、この本を読みました。イラストレーターでもあるなかむらさんなので、本の中の絵もとても可愛らしく世界観溢れる絵本に仕上がっていると思いました。

本の内容は、一人の心優しい少年と「あくま」が出会い仲良くなっていくお話です。しかし、「あくま」という存在が周りからは認められず、みんなの恐怖感や偏見から心無い言葉や態度をとられてしまいます。どんなに「あくま」が良い子どもだと訴えても分かってもらえません。ある日、昔から友だちなんて出来なかった「あくま」は、この少年とは仲良くなり、閉ざされた冷たい心がどんどん溶けていきます。そんな時に少年の大好きな家族のおばあちゃんが病気のせいで長く生きられない事を知り、少年は病院へ駆けこんだり、周りに助けを求めたりしますが、「あくま」と一緒にいる事で誰も助けてくれようとはしませんでした。困ってしまっている少年の事を想い、「あくま」は何かを悟り、ある行動に出るという物語です。

この本でとても考えさせられる所は、「あくま」が、自分の命と引き換えに、仲良くしてくれた少年の大好きなおばあちゃんの病気の元を食べる場面です。周りから理解されない自分だからわざと悪い「あくま」に変身して少年の怒りを買い、人々の前で自分を退治させて森へ帰ります。そしておばあちゃんの病気を食べた「あくま」は静かに息を引き取るのです。

何も知らない周りの人々は、散々悪口を言ったり、いじめたりしていたのに「あくま」を退治した少年を称えました。しばらくしておばあちゃんの治らないはずの病気が無くなった事が、「あくま」がしてくれた事だと気付くのですが、そんな時にはもう「あくま」はいません。遅かったのです。

この物語は、子どもが読んでも大人が読んでもそれぞれ色々な気付きや考えが溢れてくる絵本だと思います。今のこの世の中でも、差別やいじめ、偏見はたくさん存在していると思います。そして何が正解で、何が不正解なのかの判断は子どもでも大人でも難しい時があります。この本でいうと、周りの人々の行動は酷いけれど、実際「あくま」がいたら恐怖もあります。悪い生き物なんだろうという思い込みもあり、私も同じ事をするのかもしれません。「あくま」は自分を犠牲にしなければなす術は無かったのか。嘘の中でも、退治したことで仲良くなれた周りとの関係は果たして正しいのだろうか。「あくま」というこの世ではありえない存在だけど、実際の世の中でも似たような状況はあると思います。

この本は読み終えた後に、登場人物のとった行動が、正解なのか不正解なのか。ということをいろんな角度から様々な視点で考えさせてもらえる本だなと感じました。まだ、小さな子どもにも、年頃になった子どもにも、そして大人にも是非読んでもらいたいと思える一冊です。

Illustration&Quiz
イラスト＆クイズ

PN. 中3伊達蘭丸（揖斐郡）

PN. りこ（高山市）

question❷

出題・浅野 勝（安八郡）
〈答えは41ページ〉

幼稚園の子が着ている制服の色は何色？

子の思い

「桜っ子宣言」を大切にした活動

関市立桜ヶ丘小学校
3年　松本 悠吾

桜ヶ丘小学校では、だれもかなしい思いをしない楽しい学校にすることができるように、「桜っ子宣言」があります。

児童集会で、各クラス、桜っ子宣言の取り組みについて発表しました。

ぼくのクラスでは、「がんばっているなかまの気持ちを考えて行動します」「あったか言葉やあったか行動を大切にし、いじめをなくします」について取り組みました。

毎日、取り組みについてできたことをグループで星に書いてはりました。

じゅぎょうの始まる前には、すわっていない子に声をかけて、みんなが席につくことができました。

また、帰りの会ではなかまのあったか言葉やあったか行動を発表し合いました。

取り組んでうれしかったことは、よびかけにこたえてくれる人がふえたことと、クラスのえがおがふえたことです。取り組みはおわったけれど、これからも桜っ子宣言を大切にしていきたいと思いました。

五年生でがんばったこと

北方町立北方小学校
5年　林 渚十

ぼくの通う北方小学校では、全校のみんなで大切にしている三つの火があります。それは、「考える火」「思いやる火」「やりきる火」です。この三つの火について、できるようになったことをしょうかいします。

一つ目は、「考える火」です。ぼくは挙手をこつこつ続けることをがんばりました。一日五回を目標に挑戦しています。まちがえるときもあるけれど、挑戦すると決めたのでやりきれました。

二つ目は、「思いやる火」です。ぼくは、班で協力することをがんばりました。班で話し合う時には、自分の考えを話したり、聞いたり、教え合ったりして協力できました。

三つ目は、「やりきる火」です。ぼくは、委員会の仕事をやりきることをがんばりました。ぼくは、保健体育委員として、器具庫の整とんと掃除を朝早く学校へ来て、やり続けました。残った時間には、草抜きボランティアにも参加しました。このことは、ずっと続けていきたいです。

これからも、かべにぶつかった時には、絶対に乗り越える気持ちで取り組んでいきたいです。

一人じゃない

美濃加茂市立西中学校
3年　穐吉 優空

みなさんは、苦手な人とどのように関わっていますか？　自分の気持ちを押し潰してまで無理に接していますか？　それとも、避けながら過ごしていますか？　私は、自分の気持ちを押し潰して無理に接していました。つい最近までは…

私には少し関わるのが苦手な人がいました。その人は、人によって態度を変えたり、「もっと〇〇してよ」と強く要求をしたりしてきました。私としては「関わりづらいなぁ」「すごく頑張っているのに…。どうしたら認めてくれるのだろうか」とひどく悩みました。周りの友達は、「よく頑張っていると思うよ」と認めてくれましたが、その人だけがなかなか認めてくれませんでした。何度も「学校に行きたくないなぁ。どうして私だけ…」と自分ばかり責め続け、どうしてよいか分からなくなってしまいました。

そして、私は、ついに耐え切れなくなり、ある日、学校を休みました。その時、父親が「人は全員に好かれることはできない。一人二人に認めてもらえなくても、気にしなくていいよ。あなたを認めてくれる人は、それ以上にたくさんいるはずだよ」と教えてくれました。この言葉を聞いて、とても救われました。気持ちがすっきりしました。改めて考えてみると、私を心配し、声をかけてくれた友達がいるように、認めてくれる人がたくさんいることに気付くことができました。

誰だって、一人くらい苦手な人はいると思います。苦手だからといって避けてしまうのはよくないと思います。もしかしたら、苦手な人とも自分なりの関わり方を生み出すことで一歩成長できることがあるかもしれません。けれど、自分が必要以上に無理をして接することは違うことだと父の言葉から学びました。だから、私は、これからの人生の中で、

親の願い

子どもたちと共に

多治見市立笠原小学校
PTA会長　安藤 克浩

私には小学4年生と小学2年生の子どもがいます。子どもたちの学校生活に少しでも関わりたいと思い、笠原小学校でPTA会長を務めています。

新型コロナウイルス感染症が発生し、すでに三年が経過しようとしています。子どもたちは緊急事態宣言やステイホームを経験し、新しい生活様式の中を生きてきました。学校生活に関しては、修学旅行や校外学習の中止、行事（運動会・授業参観等）の中止、何かあるたびに人数制限をされる等、子どもたちだけでなく、保護者にも影響があり、本来行われるさまざまな行事を経験、体験できないことが多くありました。学校の行事は長年、積み重ねられてきたものであり、子どもたちの心を育む大切なものです。それを失った子どもたちは悲しみや憤り、時には不平等さを感じてきました。子どもたちにとって普通であり、当たり前の行事が突然できなくなってしまったのです。もしかすると子どもたちは、行事のために努力しても中止になってしまうのではないか…と、どこかで前向きに考えられず、あきらめたり、無気力になることもあるかもしれません。

私たち保護者は、子どもたちの言動が明るく見えても、心のどこかに不安や恐怖を背負っていることを理解し、子どもたちが自分のペースを取り戻せるよう、必要に応じて手をさしのべなければならないと強く思いました。そんな気持ちから、今年度、PTA会長としてできることは

もし仲間関係で苦しんでいる友達がいたら、自分から積極的に声をかけていきます。

「あなたは、絶対に『一人じゃない』。私は味方だよ」と。

県立大垣桜高校
まんが研究部

欲 vs 欲

逆さ言葉

じいさんてんさいじ
（爺さん天才児）

伊藤 友菜（海津市）

子の思い 親の願い 教育の窓

学校と共に最大限にやろうと考えました。もちろん、PTA活動もその都度、学校と協議し、判断しなければなりません。昨年度までは招集するほとんどの活動が中止されましたが、今年度はウイズコロナと受け止め、新しい生活様式をガイドラインとして「家庭教育学級」を中心に親子で体験できることを精一杯取り組みました。参加した保護者の安心した顔、子どもたちのうれしそうな顔を見ると、実施の判断に苦しみましたが本当によかったと思います。

この世代が失うだけの世代にならないよう、学校と保護者は新しい形の行事や経験、体験を作ること、また、それぞれの家族として思い出を作ることを心がけなければなりません。まだまだ先が見えず不安な状況が続きますが、失ったものを見極めたうえで、新しい生活に対応しつつもこれまでの行事を再開したり、新たに生み出したりしなければと思います。子どもたちがたくましく育っていくために、私たち大人も、その時代の当事者として子どもの成長を助けていかなければなりません。

子ども達はコロナ禍という危機を乗り越えたとき、自ら困難に立ち向かい、乗り越えていく力を身に付けることでしょう。私も子どもたちと共に困難を乗り越え、子どもたちに小さくても、少しでも、経験、体験、思い出を残したいと思います。

土曜日は習い事の日

高山市立荘川中学校
PTA　山下 三枝子

コロナ禍、外出を控え子どもたちの運動不足が心配されていた。しかし、徐々にウイルスの正体も見えてきて、習い事なども以前の日々を取り戻している。

小6の長男はスイミングスクールに通っている。お風呂や水遊びが大好きだったこともあり、長男が保育園年中の時夫がスイミング体験に連れて行ったのが始まりだった。以来、毎週土曜日は片道50キロ先のスクールへ通うことになった。

最初の頃は心配で、待ち時間は長男の練習の見学をしていた。知らない人ばかりの世界で不安だったと思うが、顔を水につけることから始まった練習は楽しかったようだ。今では1時間半の待ち時間は、私の買い物時間になった。

その後、長女と次女が合唱団に縁があり、長男と共に通うことになる。私の住んでいる地域にも、剣道やバドミントン、太鼓などいろいろなクラブ活動がある。スキークラブには3人とも通ったが、それ以外は地元貢献できずに申し訳ない。

スイミングスクールでは2か月ごとに検定がある。クロールに合格するまでは時間がかかったが、その後の背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライは順調に合格していった。1年間休まずに通い、皆勤賞をいただいた年もあった。

コロナ禍でしばらく休んでしまったが、再開し目標である1級に合格することもできた。長男が5年生の時「やめたい」と言ってきた。「1級に合格したらやめてもいいよ」と、その時に伝えていたが、1級に合格した今、そのことをすっかり忘れているようなのでそっとしておこう。

長女と次女は合唱団に加入し、人見知りながらも学校の枠を超えた友達ができた。透きとおる歌声を聴くと、涙腺が緩んで、やっぱり合唱っていいなあと改めて実感する。

我が家の習い事の日は週に1日だけだが、周りを見ると週に何日かいくつかの習い事に通っている子ども達も少なくない。本人のやる気は本当にすばらしいし、応援する親さんには「尊敬」という言葉しか出てこない。

自分のやりたいことに出会うことができると、集中力、ねばり強さが身につき、普段とは異なる人達とのコミュニケーションがうまれる。すべての経験が身になり、豊かな人生に結びついていって欲しいと願う。

さて、最近健康診断を受けた私。コロナ前は週に1回ソフトミニバレーに参加していたが、現在活動休止中。運動不足を心配しなければならないのは自分だった。久しぶりに子ども達と歩いてみようかな。

教育の窓

大人が子供に「どう生きるか」を伝えていくために

岐阜大学教育学部附属小中学校
教頭　水﨑 綾香

「私、学校の『どう生きる科』の学習内容、大好きなんですよ。『働く』ことについて学ぶときに、学校でさまざまな職種の人との出会いをつくってもらい、とてもいい経験になっています。私も自分の仕事のことを子供たちに知ってほしいですから。」

先日、ある保護者がこんなお話をしてくださいました。

「どう生きる科」とは、本校が文科省の指定を受けて研究を進めている新設の領域で、「未来社会に生きる子供たちに必要な資質・能力を育成することをねらい、例えば、8年生では「働く」をテーマにして、社会に生きる方々から話を伺ったり、実際の現場を見学したりしながら、探究しています。

このお話は私たち教職員にとって大変嬉しいものであり、私が感動したポイントがいくつかありました。

①学校で子供が学んでいる内容を、よくご存知であること。

②家庭でおそらく思春期真っ只中であろうお子さんと、『どう生きる科』の学習内容を話題にしてもらっていること。

③保護者自身が、学ぶことに対して積極的であること。

などでした。

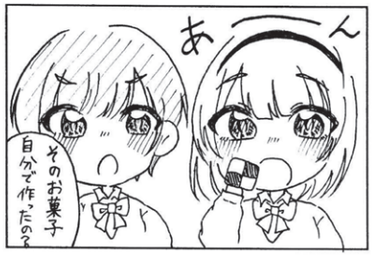
「子供が学校の話をなかなかしてくれなくて…。」という、思春期の子供をもつ保護者の悩みに対して、「それも、成長の過程のひとつですよね。」と、以前に話をしたことを思い出しながら、この保護者に思いを馳せたのです。

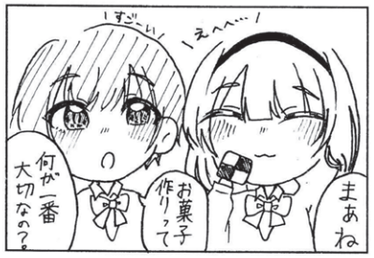
きっとこの方は、目をキラキラさせながらお子さんの話を聞いてみえるのでしょうね。だからお子さんも、授業の内容まで家庭で話をするのでしょう。もちろん思春期真っ只中の年齢ですから、状況によっては話をしない日もあるかもしれません。そんな子供のコンディションを見極めながら、コミュニケーションを図ってみえるのでしょう。

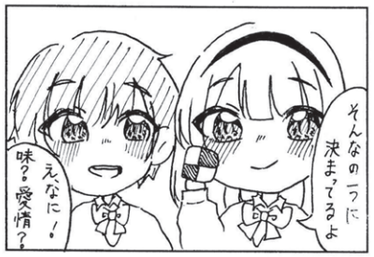
そして何よりも、保護者がご自身の仕事に誇りをもっており、その仕事の素晴らしさを子供たちに伝えたいと思っておられることや、ご自身も日々学び続けているということ、そうやってご自身の姿勢を子供に伝えてみえることが素敵だと感じました。

県立大垣桜高校 まんが研究部

譲れないもの







逆さ言葉

やいしごくからかくごしいや
（やい、しごくから、覚悟しいや）

西尾 大和（中津川市）

子の思い 親の願い 教育の窓

子供たちの成長を願う私たち大人は、まず子供の学びに関心をもち、子供が学ぶように我々大人も学び続けることが大切であると思わせてくださったこの保護者に、感謝の気持ちを抱いた出来事でした。

変わるもの　変わらないもの

関ケ原町立関ケ原中学校
教頭　和田 由美子

年と共に子どもたちを取り巻く環境が大きく変化しています。SNSやICTの進化もあり、確かに子どもたちが生活する上での基盤である家庭、家族の在り方も変容しているのは事実であると言えましょう。

最近、祖父母世代の皆さんとお話する機会がありました。その時の話題を少しご紹介します。

「うちの孫は帰ってきたらゲームで呼んでも返事すらしないわ。」

「うちの高校生の孫娘は、スマホを片時も手放さず、ずーっとやってるわ。ほんとどうしたもんやろ。」

「私らが子どものころは帰ったら家の手伝いしてあれこれやってたのに本当にこのまま大人になったらどうなるのか。」

お孫さんの生活を見て、将来を案じている方々がたくさんいらっしゃいました。その時、お一人の方がこんなことをおっしゃいました。

「確かに、ゲームやスマホやなんやばっかりやっとって腹立つこともあるけど、この前、私がちょっと遠くへ行かなくてはならない用事ができた時、息子に、電車の乗り換えやなんやを聞いとったら、そばにおった孫が、一枚の紙をくれた。それには、乗り換えの駅や時間、乗り継ぎの注意から何から書いてあって、どうしたんや、これ?と聞くと孫が、今じいちゃん喋っとったで、スマホで調べた。というんや。まあびっくりしたわ。ありがとな、ほんとに助かるわ。ほんでもすごいなあ、短い時間でこんなに調べられるんやといったら孫も嬉しそうな顔して、簡単やで今度じいちゃんにも教えたるわといってくれてな、嬉しかったんや。」

すると別の方も、

「言われてみればうちの孫娘も、広告見ている私の所へ来て、このスーパーの方が安いよと、携帯電話に掲載されているチラシを見せてくれましたね。優しいとこもあるんやわ。」

と、今度はお孫さんのよい所が話題になり、微笑ましい気持ちで聞かせていただきました。

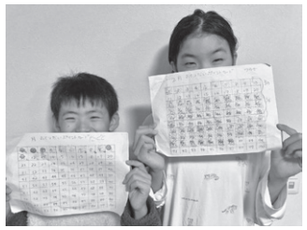
冒頭で書かせていただいたように、子どもたちを取り巻く環境は「変わるもの」であり、20年前、30年前と比べて大きく変わっています。環境の変化に合わせて子どもたち自身もICTの活用などに関わって変化しているのは事実です。しかし、このお話の中で「変わらないもの」があることに改めて気付かせていただきました。それは「人を思いやる心」です。表面上は周りに無関心でゲームやスマホに夢中になっているように見える子どもも、その実、周りの話に耳を傾け、いざとなれば祖父を思いやり、自分のできることを表出してくれる、自分から、祖母の意に添う助言をしてくれる、他者に対する思いやりの心は子どもたちの心に確実に根付いているということを感じました。

教壇に立つ私たちは、子どもたちが「変わるもの」である環境に合わせて柔軟に変化し、対応できるように支援することと、「変わらないもの」である「思いやりの心」を表出させるために誠心誠意支援して行くことが使命だと考えています。

伊藤家の巻 124

自ら動き できる事を増やす

羽島市立堀津小学校PTA副会長　伊藤 佑佳



我が家の数ある約束事から2つを紹介します。

約束1．働かざる者食うべからず

我が家はお小遣いを渡していません。「お手伝い1回10円」「賞状ゲットで500円」としています。欲しいものは努力して手に入れる。努力しなければ何も手に入らないと伝えています。

誰かのためにしたことはお手伝いとしてカウント。お手製の記録用紙にスタンプを押し、貯まるとお金に換えます。最近は、金額の高い「賞状」を目標に、習い事や資格取得に意欲的です。

約束2．自分のことは自分で

小学校入学と同時に部屋を与え、私物は自分で管理するよう伝えました。低学年の頃はよく物をなくし、一緒に探したものですが、その回数も年々減ってきています。友達を招くため、足の踏み場のない部屋を懸命に掃除する子供の姿に成長を感じます。

今はまだ小学生。成長につれ約束事も変わっていくでしょう。しかし、努力の大切さを忘れず、自分のできることを増やしていって欲しいです。

話そう!語ろう! わが家の約束

北家の巻 125

約束1、早寝早起きをしましょう
約束2、本を必ず本棚に戻しましょう
約束3、タブレットやゲームはやることを済ませてから使いましょう

わが家には2人の子どもがおりますが、普段心がけているのは右の3つです。

早起きに関しては2人とも超優秀で、いつも私が起こされる側ですが、最近は上の子が遅くまで勉強していることが多く、早く寝るのも大切だと呼びかけているところです。

本の件は、特に下の子が本棚に本を戻さず別の場所に積み置く癖があり、見つける度に言い聞かせており、徐々に自分で片付けられるようになってきました。

ゲームやネットの利用に関しては、わが家では、宿題を早く終わらせたらその分長く遊んでもOKとしており、あまり厳しくはしていません。ただし、設定で利用時間を制限するなどペアレンタルコントロールを徹底しています。

今後も必要に応じてルールを見直し、2人の成長に繋げていきたいと思います。

安八町立登龍中学校PTA会長　北 純一

当たり前のことを当たり前に

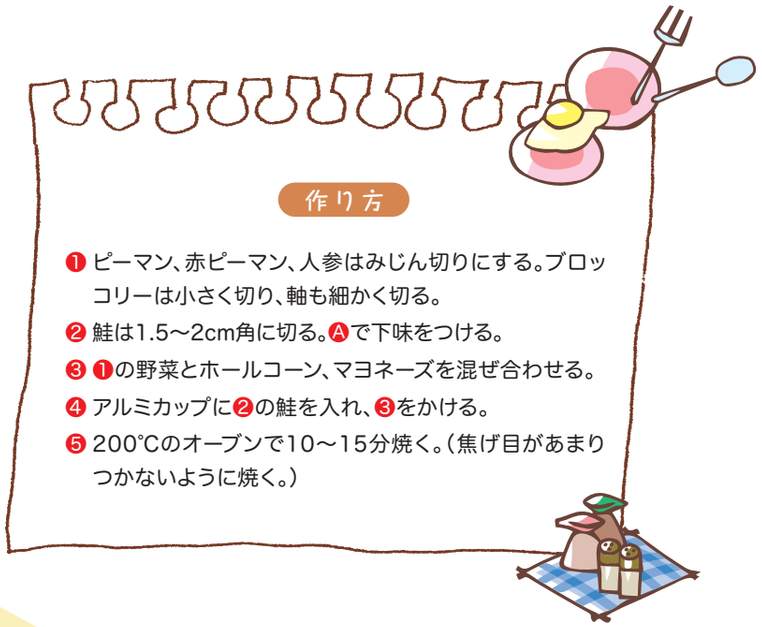
お試しクッキング

鮭の花園焼き

岐阜県学校栄養士会・（公財）岐阜県学校給食会

鮭の上に色鮮やかな野菜をのせるので、見た目が美しく、花園のように見えることから、この名前が付けられました。マヨネーズ味の野菜と鮭の組み合わせは相性がよく、子ども達に大人気の1品です。野菜の苦手な子にもおすすめです。

鮭は、角切りではなく、切り身のまま使ってもよいです。他にもさわらやタラ等、白身魚がおすすめです。ぜひ作ってみてください。



作り方

❶ ピーマン、赤ピーマン、人参はみじん切りにする。ブロッコリーは小さく切り、軸も細かく切る。
❷ 鮭は1.5～2cm角に切る。Ⓐで下味をつける。
❸ ❶の野菜とホールコーン、マヨネーズを混ぜ合わせる。
❹ アルミカップに❷の鮭を入れ、❸をかける。
❺ 200℃のオーブンで10～15分焼く。（焦げ目があまりつかないように焼く。）

材料

【材料】（4人分）

鮭……200g
Ⓐ 酒……小さじ1
Ⓐ 塩こしょう……少々
ピーマン……1/2個（20g）
赤ピーマン……1/8個（20g）
人参……2cm（20g）
ブロッコリー……3房（40g）
ホールコーン……20g
マヨネーズ……大さじ3
アルミカップ……4枚

●栄養価（1人あたり）

エネルギー	132kcal
たんぱく質	12.1g
脂質	7.8g
カルシウム	11mg
鉄	0.4mg
亜鉛	0.4mg
ビタミンA	63μgRE
ビタミンB_1	0.16mg
ビタミンB_2	0.11mg
ビタミンC	25mg
食物繊維	0.9g
食塩相当量	0.3g

3月号の

親子ではてな

Q1 「国民の祝日」の一つである「春分の日」とは一体どんな日のことでしょうか？

ア　昼と夜の長さがほぼ同じになる日
イ　花粉が一番多い日
ウ　気温が高くなる日

Q2 毎年、春になると桜の開花宣言がされますが、標本木にどのくらいの花が咲いたら開花とされるでしょうか？

ア　1輪の花が咲いたとき
イ　2～3輪の花が咲いたとき
ウ　5～6輪の花が咲いたとき

応募方法

応募者は、はがきで、3月末までに下記の宛先へお送りください。
（1人1枚・当日消印有効）
※クイズの答えは1問だけでもOKです。

宛先　〒500－8816
岐阜市菅原町3-3
岐阜県校長会館内
岐阜県PTA事務局
「わが子のあゆみ編集部」

なお、応募はがきには『わが子のあゆみ』への感想・意見やなぞなぞの問題と答え、逆さ言葉などを記入してください。

- ●3月号クイズの答え
- ●郵便番号・住所
  学校・学年・氏名
  保護者名
- ●『わが子のあゆみ』への感想・意見
- ●「なぞなぞ」の問題と答え
- ●逆さ言葉

1月号クイズ答え

Q1 イ　Q2 ウ

1月号のクイズ当選者

赤堀　晴輝（岐阜市）　勝　有萌果（不破郡）
伊藤　慶哉（岐阜市）　山川　翔太（安八郡）
木村　陽平（各務原市）　鈴木　花歩（郡上市）
高田　瑞希（各務原市）　玉腰和都子（郡上市）
高橋　杏奈（本巣市）　児玉　陽菜（加茂郡）
堀　希実（羽島郡）　平田　健人（加茂郡）
松原　壮右（羽島郡）

なぞなぞの答え

①ウサギ（ナ→サ）
②えんじ色

互いのよさを認め合いながら、地域とのつながりの中で育つ

▲緑苑小校章

緑苑小学校は、緑苑団地が造成されたことに伴い、山を切り開いて、昭和51年4月に開校されました。豊かな自然、景観、史跡に恵まれ、多くの世帯が移り住み、昭和63年には、全校児童が912人を数える大規模校でした。その後、世代交代が進み、現在は、全校児童130人の小規模校となっています。

校章は、常緑の松の木に囲まれた地に開校したことから、緑苑の文字を4本の松葉で囲み、知・情・意・体の調和のとれた児童が互いに手を取り合い、助け合ってたくましく育つ姿を象徴しています。現在もその願いは、引き継がれ児童の中に脈々と宿っています。子ども達は恵まれた自然環境の下、広い校舎・校地でのびのびと学び、学年を越え、温かく支え合っています。

地域とのつながりの中で育つ

コロナ禍で、色々な行事が中止・縮小されましたが、リョクエンナーレ・体育発表会・市民運動会・敬老の集いの実施など様々な形で、学校と地域をつなぐ努力を続けています。

リョクエンナーレとは、デザインや工芸のワークショップを通して、世代を超えて緑苑地区の人々をつなごうと有志で組織された団体です。本校の児童もその一員として、この活動に参加し、地域に作品を発信し、街づくりの一環として取り組んでいます。今年度は、鵜沼光る風鈴プロジェクトとして、「光る風鈴づくり」に取り組み、校内だけでなく、中山道鵜沼宿脇本陣にも作品を展示し、それぞれの願いや夢を描いた短冊をつけて、多くの人に見てもらうことができました。冬季には、お正月リースやステンドアートなどの作品作りにも取り組みます。

▲敬老の集い

▲校舎全景

多文化共生と福祉教育

本校は、外国籍児童の数も平成10年度頃より増加傾向になり、平成12年に、外国人日本語指導教室「なかよし学級」が開設されました。ピーク時には外国籍児童の数は、25人を上回りました。現在も9名の外国籍の児童が在籍し、日本語指導を受けています。言語や民族、文化、習慣のちがいを認め合いつつ日常生活を過ごしています。

そうした現状を受け止め、今年度より岐阜県東京パラリンピックレガシーとしての「カナダホストタウン交流」事業に参加しています。カナダパラリンピック陸連の選手との交流を核に、障がい者スポーツを体験しました。パラリンピック陸上選手との交流会を行う中で、外国語を用いコミュニケーションを図り、障がいのある方々のたくましさや強さを学んでいます。互いのちがいやよさを理解する素地を育てています。

児童数の減少に伴い、来年度より、各務原市の小規模特認校として、市内の学区から入学希望者を受け入れていきます。

これまで、本校が育んできた、仲間同士助け合うこと、温かく受け入れること、また仲間を増やしていく営みを本校の伝統として培っていくことがまさに「校風の伝承」となっていくと信じています。

▲福祉教育パラ（ゴールボール）

▲リョクエンナーレ制作

▲福祉教育（パラ陸上）

▲リョクエンナーレ鵜沼宿展示

桜尾小学校は山県市の南部に位置し、周りを山や田畑に囲まれた自然豊かな地域にあります。学校の西には鳥羽川が流れ、春には川の両岸に美しい桜の花を咲かせます。児童数は67名で、来年度150周年を迎えます。

ふるさとを愛する心を育てる「さくらお探検隊」

昨年度から、総合的な学習の時間において、歴史や生物、鳥など、自分の興味・関心があることについて3～6年生でチームを作り、「さくらお探検隊」として学習しています。地域の方にもご協力いただき、城跡の発掘現場を見学したり、市内の名所や施設を訪問させていただいたりしました。その後、体験活動や地域の方の話から得た情報をまとめ、発表しました。

へび瓜などの農作物の育て方を学ぶ野菜調査隊

市の特産品の一つである栗の皮むき機を見学する山県調査一課

水生生物や川の水質を調査する鳥羽川調査隊

縦割りグループの活動

全校児童を6つのグループに分けて、掃除や休み時間の遊びを行っています。また、「さくらオリンピック」（運動会）、危険予知トレーニング（学校生活での様々な場面における危険の理解と安全な行動の仕方を考える学習）、道徳の一部も縦割りグループで行っています。さくらお探検隊も含め、異年齢集団での学習や活動を積極的に取り入れています。

道徳・この日のテーマは「思いやり」

さくらオリンピック・縦割りグループでのリレー

危険予知トレーニング・危険箇所の確認をし、解決策を話し合う

自分の健康は自分でつくる・歯の取り組み

本校は、一昨年度、全国健康づくり推進学校表彰事業で最優秀校、昨年度は、全日本学校歯科保健優良校表彰で最上位である優秀賞を受賞し、健康教育に特に力を入れています。

1学期は、学級活動の時間に学校歯科医も参加し、歯の役割や健康な歯肉づくりなどに関する学習を行いました。2学期は、市の健康介護課の歯科衛生士と学校歯科医からよりよい歯磨きの仕方を教えていただきました。また、月1回プラークテストを行い、日々の自分の歯みがきに生かせるようにしています。今後も工夫や改善を加え、家庭の協力も得ながら継続していきたいと思います。

歯に対する知識を深める1学期

歯みがきのスキルを学ぶ2学期（1年生は親子で歯みがき）

児童会の健康委員に教わりながら給食後の歯みがきに取り組む

大垣市立北中学校

夢中！熱中！ 我らが部活

吹奏楽部

私たち吹奏楽部は、「よき奏者である前によき生徒であれ」をモットーに活動しています。コロナ禍の中、練習の制限もあり苦しい約2年間でしたが、何度もミーティングを行い、同じ目標へ向かって全員で練習を重ねました。また、演奏をする上で基礎練習をやり込んだり、よりよい曲が作り上げられたりするように、集中し一生懸命に練習したりしてきました。さらに、コンクールなどの結果だけにこだわるのではなく、仲良く楽しい演奏ができるよう、日々の生活での交流も大切にしています。支えてくださる方々への感謝の気持ちを演奏を通して伝えられるように、精一杯頑張ります。

バドミントン部

私たちバドミントン部は、男女ともに全国大会上位入賞を目指し、練習に励んでいます。普段の練習では全員が声を出し、自分だけでなく、みんなの気持ちを高めています。また挨拶や返事を大切にし、全国で活躍する選手になるために、技術はもちろんのこと、礼儀も大切にしています。個人戦での目標は一人一人違いますが、ランニングや縄跳びなど基礎練習は全力で行っています。掲げている目標は決して簡単なことではありませんが、努力を継続できるのは、支えてくださる先生やコーチ、一緒に戦う仲間の存在が大きいです。来年の中体連に向けて、全力で取り組んでいきます。

陸上部

陸上部は、現在13人で活動しています。目標は、中体連県大会に出場することです。そのために冬のトレーニングとして北グラウンドで走り込みをしたり、金生山で坂道ダッシュをしたりしています。陸上部の大会は、個人種目が多いけれど、仲間の試合の時は、陸上部全員で応援したり、緊張を和らげるために付き人をしたりして、競技での成績をよりよくしようとしています。次の大会に向けて、もっと練習に励み、中体連県大会に陸上部のみんなで出場できるようにしたいです。

野球部

野球部では、春の県大会出場を目標にしています。市大会での準優勝という悔しさをバネに日々練習に取り組んでいます。公式戦や練習試合、練習などを通して、審判、保護者へのあいさつを大切にしています。また、平日には、筋トレを行って、学校が休みの日には、素振りを200回行い、体を強くしています。大垣には、ライバルとなるチームがいますが、春の市大会で勝てるように頑張ります。練習では、色々なヒントを教えてもらいますが、最後に決めるのは自分です。その答えを出せるように、チーム一丸となって頑張ります。

バスケットボール部

バスケットボール部は、仲間と共に楽しく、そして西濃大会での勝利を目指して日々の練習に全力で取り組んでいます。ウォーミングアップから全力で走り体力を付けること、あいさつや練習の声を全員で出すこと、指導者・保護者に対して礼儀や感謝の気持ちを忘れないことを大切にして練習をしています。コートの中では先輩後輩関係なく、練習中はお互いを思いやってアドバイスをして、仲が良く絆が深くなりました。さらにチーム力、団結力を高められるように頑張ります。そしてリーグ戦では、1試合でも勝てるように練習で行ってきたことを生かしてさらなる高みを目指していきます。

文化部

私たち文化部では、特に大会などはありませんが、個々のスキルアップを目指し、活動に励んでいます。真剣に取り組み、互いに教え合いながら活動をしています。時には製作したものを見せ合い、評価し合ったり、学年を越えて絆を深め合ったりしています。コロナ禍で活動回数が少なくなっていますが、1回1回を大切に部活に取り組んでいます。

女子ハンドボール部

女子ハンドボール部は、東海大会出場を目指し、日々練習しています。「堅守速攻」これが、私達が目指すプレースタイルです。そのため、練習のアップにはシャトルランを取り入れ、前後半速いペースで試合を走り切るための体力づくりに取り組んでいます。中には100回を達成した人も何人もいて、体力では、どのチームにも負けません。また、練習中も普段の生活でも先輩後輩関係なく声をかけ合う仲の良い部です。お互いの信頼が、私達全員でボールをつなげてシュートにもっていくというプレーに結びついています。この仲間で必ず目標を達成してみせます。

剣道

剣道部は、合計6人で活動しています。6人中3人は、中学校から始めたメンバーです。最終目標は、中体連団体での西濃大会入賞です。中学校から始めたメンバーは、本当に何も分からない状態からスタートしましたが、数ヶ月の間でどんどんうまくなり、成長しています。今後もみんなと頑張って、少しでも3年生の先輩方に追いつけるよう、目標に向かって努力していきます。

サッカー部

サッカー部では、合同チームで「本気」というスローガンを常に意識し、練習に励んでいます。来年度の中体連で西濃大会に優勝し、県大会への切符をつかむために平日の夜や休日を使って練習をしています。前回の大会では、惜しくも県大会に出場できず、とても悔しい思いをしました。しかし、その悔しさを糧に自分たちの弱い部分を見つけ、全員で目標を再確認したことで、今ではチーム一丸となって前向きに練習しています。「県大会に出場」という目標を達成するためにこれからも本気で取り組んでいきます。

ソフトテニス部

ソフトテニス部は、男女共に活気のある雰囲気で活動をしています。日々の練習から上手になろうと目標をもって一生懸命取り組んでいます。練習では、ボレー、ストローク、サーブの練習などを行っています。私たちは、昨年の先輩のように上手になろうと協力して、ボール拾いをしたり呼びかけをしたりして1・2年協力して練習しています。

私たちのPTA

郡上市立明宝中学校PTA

3年生国語授業参観の様子

「親子で情報モラルを学ぶ会」で講師の話を聞く様子

総合学習で1年生が磨墨太鼓を発表する様子

家庭教育学級で講話を聞く様子

家庭教育学級で小グループで親子交流する様子

親子奉仕作業でグランドの草引きをしている様子

1. はじめに

明宝中学校がある郡上市明宝と言えば、「明宝八ム」「めいほうスキー場」がまず思い浮かぶのではないでしょうか。岐阜県で知らない人はいないのではないかと自負しています。産業の面だけでなく、「気良歌舞伎」や「磨墨太鼓」と言った地域文化もとても豊かなところで、令和4年には、明宝寒水地区の「寒水の掛踊(国重要無形民俗文化財)」がユネスコで無形文化遺産に登録されることとなり喜んでいます。

一方、深刻な問題点として少子化が挙げられます。今年の全校生徒数は20年前に比べ半数以下の31人です。子供の数が減るということは同時にPTA会員が減るということになります。子供の減少に伴ってPTA組織や活動も見直さざるを得ない状況で、何年もかけて、持続可能な組織の編成と有意義な活動への焦点化を進めてきています。焦点化の視点は、「親と子が共に行う活動を大切にする」ことです。

2. 令和4年度の組織と活動計画

【本部役員会】会長1名・副会長2名
・生徒会とコラボであいさつ運動
・親子奉仕作業
・学校行事生徒会行事への協力

【学年委員会】各学年1名(内一人は副会長が兼務)
・学年懇談会
・親子で情報モラルを学ぶ会
・学校行事や生徒会活動への協力

【家庭教育部】各学年1名(内一人は副会長が兼務)
・親子で取り組む「私の献立」
・県事務所振興防災課と連携した家庭教育学級
・ベルマーク収集

3. 活動の様子

多くの活動で、親と子、生徒と保護者のあたたかい交流が見られました。特に1年生の「わが子は思春期・反抗期」をテーマに行った家庭教育学級では、後半の親子交流会の中で、どのグループからも笑い声が聞こえ、楽しくあたたかい関係づくりが見られました。また、今年から明宝中で創設された「ふるさと部」が、体育祭や地域の運動会で企画・運営した地域種目「郡上踊り」と「障害物競争」に多くのPTA会員が参加し、ここでも子供たちとの絆が深まりました。これからも「親と子が共に行う活動」を大切にしながら、あたたかい活動を進めていきたいと思います。

「私の献立」の企画書と実践

文化祭での「私の献立」の展示

体育祭でのふるさと部地域種目の様子

文化祭での全校合唱発表の様子

あいさつ運動の様子

めいほう運動会でのふるさと部地域種目の様子

がんばる子らの

汗と笑顔と眼差しと

揖斐川町立揖斐小学校

みどり班活動

１年生から ６年生の縦割りグループで1年間、遊んだり、掃除をしたりしています。異年齢で活動することにより、高学年はリーダーとしての関わり方を身に付け、低学年は高学年を見習って、行動しようとしています。

なかよしウォーキング

毎年、みどり班活動で一番初めに行うのが「なかよしウォーキング」です。

新１年生を迎え、縦割りグループでの交流を深めると共に、仲間を思いやる心を育てています。山登りの時に高学年が低学年を励ましたり、ゆっくり歩いたりする温かな言動が多く見られる活動です。

プログラミング学習

５・６年生は、自分の組み立てたプログラムでドローンを動かす体験をしました。ペアの仲間とどうしたら目的の場所にたどり着くかをじっくりと話し合い、うまくいったときには歓声をあげていました。

カワゲラウォッチング

４年生は地域にある川で環境の調査を行いました。川にいる生き物から、水のきれいな川なのか確認します。たくさんの生き物を見つけ、大喜びでした。

草取りボランティア

運動会に向けて、朝の活動の時間に、運動場の草取りを行います。委員会の児童が昼休みに草取りボランティアを呼び掛けると、高学年の子も低学年の子も進んで取り組みました。

機関誌「わが子のあゆみ」
令和4年度　春風号
第74巻5号　通巻475号

発行／令和５年３月１日　岐阜県PTA連合会
〒500-8816　岐阜市菅原町3-3　岐阜県校長会館内
電話／058（262）3257　FAX／058（262）3259
Eメール／info@gifu-pta.jp　ホームページ／https://gifu-pta.jp
編集／岐阜県PTA連合会広報委員会「わが子のあゆみ」編集部
印刷／サンメッセ株式会社